

元魔術師の付き添い人になりました

つりーはうす

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔術学院を首席で卒業し、帝国国境警備隊に所属しているオダ。ある日国境付近を哨戒中に大規模な魔術攻撃を目撃する。急いで現場に駆け付けるとそこには一人の少女が女性を抱きかかえ泣き崩れていた……

見てはいけない現場に居合わせたことにより彼や周りの運命が大きく狂わされていく。オダは運命に立ち向かえるのか。

他の作品とクロスオーバーしている箇所が出てきます（多分）

はつきりと登場させないのでどの作品かは書きませんが、そこも楽しんで読んでくれると嬉しいです。

目次

短編 1	94
あとがき (とネタバレ)	92
1 5 話	87
1 4 話	80
1 3 話	75
1 2 話	70
1 1 話	66
1 0 話	61
幕間 3	56
9 話	50
8 話	44
7 話	39
6 話	35
5 話	31
幕間 2	24
4 話	21
3 話	16
幕間	9
2 話	5
1 話	1

1話

「姉さん！姉さん！」

「おい！あそこだ。生存者がいるぞ！」

「わかりました。先輩」

先輩が指を指した先にはあたり一面が焼け野原となった場所に、少女が女性を抱きかかえて泣き崩れていた。

時を遡ること数時間前

「しっかし国境警備といってもあつちとは違いこつちは楽だな」
レザリア王国国境

「先輩、暇だからといってさぼらないでください。俺たちは帝国の安全を守るため、国家に仇なす奴らを入れないためにここにいるんですよ」

「分かっているよ、オダ君。しっかし相変わらず優等生な発言だな。さすが彼のアルザーノ魔術学院を首席卒業しただけあるってことか」「無駄口叩く暇があるのなら・・・」

「わかったわかった。とりあえず俺に向けている指を下ろせ」

両手を上げている先輩を横目に、俺は先輩とともに哨戒任務を続けていた。

魔道大国と名を馳せ、北セルフオード大陸北西部に位置する国、アルザーノ帝国。

我らが君主であるアルザーノ7世が御座す帝都オルランドからはるか離れた地に展開しているアルザーノ帝国国境警備隊に俺、オダは所属している。

早いものでアルザーノ魔術学院を首席で卒業してから、アルザーノ国境警備隊に入隊し、この地で働いてからすでに1年が経った。

「でもよ、オダ君。なんでこんな辺境で働こうと思ったんだ？せつかく首席であるアルザーノ魔術学院を卒業したんだ。引く手あまただっただろ？」

「1年目から給料がよかつたんですよ先輩。俺の事情は知っているでしょう。孤児院のガキどもに飯を食わすために金が必要なんですよ」「まあそうだけだよ。こっちは比較的安全だけどレザリア王国との国境警備に回される可能性だってあるんだぞ」

「いやさすがに俺が生きている間にこっちからレザリアとは戦端は開かないでしょ。仮に向こうから攻めてきたとしても結局徴兵されて戦地に赴くんで。死ぬのが早いか遅いかの違いだけですよね」

「ドライだね〜オダ君は。それじゃ軍は？宮廷魔導士団からももちろん声はかかりましたよ。でも自分から死地に行くのは嫌じゃないですか」

「……さつき自分が言ったことを振り返ってみようかオダ君？」

先輩が白い目で見てきたが、俺は無視した。

物心ついた時にはすでに両親はなくなっていた俺にとって、孤児院や院長先生、一緒に暮らしているガキどもが、俺の唯一の心を置くことなくいられるところだ。

魔術を少し齧っていた院長先生のおかげで俺に魔術の適性があることがわかり、ガキどもの生活を楽にしたい、院長先生に恩返ししたいという一心から俺は魔術の勉強を一生懸命頑張った。

その甲斐あってか、アルザーノ魔術学院を特待生で入学することが出来たが、そこは国の将来を担う者が学ぶ学舎、アルザーノ魔術学

院。

俺以上の才能を持っている者が多数在籍しており、その中で優秀な成績を残さないと特待生の身分が剥奪され、奨学金が失われる恐怖と常に闘ってきた俺は必死に喰らいつき、いつの間にか首席で卒業することとなった。

いや本当に二度と戻りたくない。

首席になってからというものの、あのプライドだけは高い貴族の生徒どもに目の敵にされ、毎日のように決闘を挑まれたな。

まあ俺には魔術以外にも隠し玉があつたおかげで何とかやりくりできたんだが……。

そういえば、歴代最年少で入学してきたアイツは大丈夫だろうか？

アノ人もいつもは甘いけど、学校に関しては介入してこなかったし。

俺は^{正義の魔法使い}夢を^{第七階梯}目指している男の子と世界最強の魔女の顔を思い浮かべていた。

「よしオダ君。〃西部戦線異状ナシ、報告スベキ件ナシ、我ラハ帰還セシ〃司令部に報告したまえ」

「何ですか先輩。とうとう頭が逝かれたんですか？これは大変だ。

シヨックボルトで治るかな？」

「おい！オダ君！指を下したまえ。俺は平常だ」

「じゃあなんで急に変なことを言い出したんですか？」

「いや〜暇すぎてさ。報告くらいなんかかつこよく言いたいじゃん？」

「はあ〜この先輩は。いいですか。国境警備というのは……」

グウオオン

「!!!」

いつものようにくだらないやりとりをしていると、急に大きな火の手が上がった。

間違いない、あれは魔術によるものだ。

一体だれが。そう思っていると、

「オダ君、本部に報告！〃緊急事態発生。A級軍用魔術相当による大規模攻撃を視認。応援求む〃早く！」

さつきまでのほほんとしていた先輩の顔つきが変わり、その姿は歴戦の古参兵のようだった。

「応援呼びました」

「よし、じゃあ俺たちは現場に向かうぞ」

「しかし先輩。現場へは応援部隊を待つてから行くのが安全では」

「俺たちは帝国の安全を守るためにここにいる、だろオダ君。現場に近いのは俺たちだけだ。一刻も早く状況を確認しないといけない。万が一だけど敵性国家レザリア王国や反政府組織天の知恵研究会による攻撃かもしれないからな。あと君の腕には期待している。正直言つて俺はC級軍用魔術を3節詠唱しかできないからな。頼んだぞ」

「はあく分かりました。分かりましたよ。魔術戦になったら俺が攻撃、先輩は防御を頼みます」

「おう、まかしとけ。よし行くぞ！」

「はい、先輩」

俺たちは現場へと向かった。

2話

「姉さん！姉さん！」

「おい、あそこだ！生存者がいるぞ！」

「はい、先輩」

魔術攻撃があつたと思われる場所に二人は着くと、泣き崩れている少女とそれに抱き抱えられている女性を中心に、周りはすべて焼き尽くされ、跡形もなくなり、そこら一体が荒野と化していた。

「帝国国境警備隊です。大丈夫ですか」

「ちよつとまつてください、先輩」

先輩が生存者の元に駆け寄ろうとしたが、オダは先輩の手を引き、なんとか踏みとどまらせた。

「何をするんだ、オダ君！一刻も早く彼女らを助けないと」

「落ち着いてください先輩。おそらく彼女らがこの状況を引き起こした張本人かと思われます。だとすると、怪我を負っているとはいえず、とんでもない実力の持ち主です。そして一番のポイントは、その彼女たちがアルザーノ帝国こちら側の人間なのかがわからない点です。なので、ここは慎重に動くべきです」

「ではどうしろというんだ！」

先輩が顔を近づけ、激しい口調でオダに問い詰めてきた。

「まず身元が分かるまで拘束すべきです」

「一人は見たところ重傷だぞ」

「分かっています。とりあえず俺に任せてください」

オダはゆっくりと、警戒して彼女らに近づいた。

「アルザーノ帝国国境警備隊の者です。動かないでください。大人しくすれば何もしません。ですが何か変な素振りを見せれば・・・わか

りますね」

オダは腰につけていたホルスターから愛用の魔銃“ジムノペディ”を引き抜き、銃口を彼女らに向けた。

「て、帝国宮廷魔導士団所属、イヴⅡイグナイト十騎長です。この人は帝国宮廷魔導士団リディアⅡイグナイト百騎長です。お、お願いします。姉を、姉を助けてください」

そう言うと、彼女は軍の記章と階級章をオダに見せてきた。帝国軍に所属しており味方のようなのだ。

「イグナイト家の者か・・・」

「先輩？どうかしたんですか？」

「いや、何でもない」

さつきまでとはうって変わり、先輩は神妙な面持ちでこの二人を見ていた。

が、それも一瞬のことで先輩はイヴ十騎長に話しかけた

「周りに敵は？イヴ十騎長」

「い、いません。姉が、リディア百騎長がすべて倒しました」

あんな大規模な魔術攻撃を行なったのは、気を失っているこの人によるものらしい。

一人であれほどの魔術を発動させるなんて一体何者なんだ、この人は。

「よしオダ君。周りに敵勢力はいないらしい。身元もわかったし、拘束する必要もないな。応援部隊が駆けつけるまでに二人に応急措置を施してくれ。俺は回復魔術なんて不得意中の不得意だからな。頼んだぞ」

「それ、自慢することじゃないですよ。先輩」

そう言いうと、オダは一番傷を負っており、現在も気を失っているリディア百騎長の手当てから始めた。

「お願いします。姉を助けてください」

「分かりました。少し離れてください」

気を失っており一見すると重傷だが、命に係わるほどではなさそうだ。

よし、始めるか。

オダは治療を開始した。

「術式起動。^{ヒーラーズベル} 法医呪文」

オダは魔晶石を手に持ち、起動術式を唱えると、リディア百騎長を中心に術式が展開される。

すると外見上の傷はみるみるうちに修復された。

「うそ……。軍用じゃないただの回復魔術なのになんて力なの」

「驚いたかい？ イヴ十騎長。あれがアイツが持っている魔術特性「性質の維持・持続」を利用した固有魔術だ。^{オリジナル} 魔晶石に魔術式を刻印し、魔力を込めることで、いつ、どこでも、だれでも同じ効力で魔術が発動できる。しかもアイツが持っている魔銃“ジムノペディ”にその魔晶石を埋め込むことで、魔術が無詠唱かつ魔晶石に込めている魔力が尽きるまで発動もでき、威力も調節できる優れものさ。

まあただの一節詠唱だけなら軍のエリートの人々でも出来ることだが、アイツの固有魔術で一番すごいところは他人の汎用魔術、そしてなんとといっても他人の固有魔術までも発動できることだ。一体どういうカラクリなんだろうな。

まあ他人の固有魔術、汎用魔術を一度使うと二度使えない使い捨てだし、詠唱もしなければならぬけどな。今使っている回復魔術だってアイツではなく、魔術学院でお世話になった凄腕の回復術師の娘さんの魔術だそうだ」

「なに自慢気に説明しているんですか、先輩。自分のことじゃないのに。それより最後の方から俺のこと貶してませんか？」

「まあまあ気にするな。可愛い後輩の活躍を伝えるつてのが先輩の役

割だろ」

「はあ、まあいいです。とりあえず外傷は治療しました。次はイヴ十騎長の応急措置をすることで来てください」

「は、はい」

彼女らの応急措置が終わると応援部隊が駆けつけてきた。

後は彼らに任せよう。

幕間

「くそ、誰か止めろよ、相手は新入りだぞ」

「そうはいつでも、学院に多大な支援をしてくれるシユウザ―家の次期当主であり、あの若さで第四階梯へ至った天才だぞ。気軽に言える立場じゃないんだ」

ある日の会議室、ここ最近の出来事となったとある新任教授が起す騒ぎをどうするか、学院の講師は議論していた。

「静かに！今は誰を彼の生け贄（助手）にするか決めなければならんのだ」

話しが逸れ始めた頃、学長が最初の議題にして最大の問題を講師陣に突きつけた。

「嫌だ！私は一度手伝ったから今回は抜けるぞ」

「おいまで、生け贄（助手）を選出するのは公平にと最初に決めたことだろ、抜けるなんて許さん！」

まさに会議は踊る、されど進まず。

今回も延々と決まらないかと思つたその矢先。

「学長・・・彼に頼むのはどうですか？例の首席に」

「アイツに？だが彼は生徒だぞ」

「彼の出自は学長も知ってるかと。餌（金）をぶら下げたら飛びついてくるのでは？」

下品な笑みで学長、マキシムIIテイラーノに貴族主義で凝り固まつた講師が提案する

「ふむ・・・それはいい提案だ、彼は金が手に入り、私たちは平穩を得る。まさにwin-winだな」

「いつもはうっとおしいと思つてましたが、今回は彼の下賤な身分を利用できそうですな」

周りの講師も自分たちが助かるならという判断でこの二人の意見

に賛成した。

「……かな」

オダは学院長から直々の依頼により、とある教授の実験の助手を依頼された。

依頼した時のあの学長の顔はやや嫌悪感を感じたが、莫大な依頼料を見せられ、孤児院のガキどものためと思い、渋々引き受けた。

「失礼します」

「ん？誰かね君は」

「学長からあなたの助手をしると依頼されたオダです」

「ほう今回は学生が助手か、よく来てくれた。これで実験が進む」

「素晴らしいオダに握手を求めたのは、今学院中の話題の中心となっている人、オーウェンⅡシユウザ―教授。」

オダとは見たところ僅か2, 3歳しか離れていないようにも関わらず、すでに第四階梯へと至った若き天才であり、このままいくと近い将来第五階梯に進むのも時間の問題といわれている男である。

「それで今回はどんな実験なんですか？」

「そうだそうだ、君にはこれを飲んでもらう」

「そういうとオーウェンは戸棚から出した薬をオダに手渡した

「これは何ですか？」

「なんとこの薬を飲むと周りの人間に対して言うことをすべて聞かせることが出来るのだ。普段いじめられっ子の気弱い少年少女でもこれさえ飲めばいじめっ子に対して命令できる、まさに虐げられた者にとって夢のような薬なのだよ!」

オーウエンの力説を軽く聞き逃し、オダは質問した。

「その間、相手は命令されていることを覚えてるんですか?」

「もちろん覚えていないに決まっているだろう。その後仕返しされたら元も子もないしな」

「・・・あなたは天才魔術師と聞いていましたがそうではなさそうですね」

「なに! 貴様、聞き捨てならないぞ」

オダは怒るオーウエンを無視し、さらに続ける

「俺なら薬の効果中も覚えさせますよ。仕返しが怖いから覚えさせない? 逆ですよ教授。命令中のことも覚えさせるんですよ。薬の効果が切れた後も羞恥心で苦しませて精神的に追い詰める。あなたならそんな薬が作れるでしょ?」

オダの提案を聞いたオーウエンの目は輝いていた

「な・・・なんていうことだ、このオーウエンがそんな些細なことに気づけなかったとは。このオーウエンの手がかかればすぐにでも改良できよう、少し待っておれ」

そう言うときオーウエンは研究室の奥に籠り、薬の改良作業を始めた。

「先生、少しよろしいですか」

「どうした・・・ちっ！貴様か。首席かどうか知らんが私に声をかけてくるな」

オダが話しかけたのは先ほどの会議で学院長に今回の話を持ち掛けた教授である。

貴族主義に固まった教授はもちろんオダのことを見下していた。

「いえ、ぜひお聞きしたいことがあるんですよ。あなたが隠していることは何ですか？」

「何？そんなことなぜ貴様に・・・」給付金を着服している“!!”

教授は墓場まで持つていくであろう情報をあつさりとおダに吐いてしまった

「なるほど、道理で最近羽振りがいいと思っていたらそんなことしていたんですか。他はないんですか」

「今年の新入生の女子生徒に手を出した”んんん!!!”」

その後、すらすらと黒い情報が駄々漏れた教授は息をしておらず、オダは次のターゲットを探すため、その場を立ち去った。

その後、オダは今まで自分の出自で嫌がらせをしてきた講師陣、生徒にその魔の手を使い、彼らの弱みをすべて握った。

この結果、オダに対して学院側は何も手が出せず、唯一出来たこととしてセリカⅡアルフォニア教授以来二人目となる、オーウエンの助手を引き受けさせないことだけが決まった。

しかし研究は手伝えなくとも、年も近い二人はすっかり意気投合し、共に茶を飲む関係となったことで、オダが放課後オーウエンの研究室へと足を運ぶ姿がよく目撃された。

それを見た被害者たちは戦々恐々とするのだが、助手をしないとい

う約束は守っているようなので、この件に関しては一切誰も触れなかった

少し話を脱線するがオダが卒業した直後、マキシム以下不正を行った講師陣はすべて学院を辞めた。この裏には教導省にこの話をオダが伝えたという話があるような、ないような・・・

真実は全て闇の中である。

卒業当日

「久しぶりですね、教授。しかしまさか引きこもりのあなたが式に出席とはどういう風の吹き回しですか？」

「君、さすがの私でも友が旅立つその日を祝わないはずがないだろう」
そう言うとおーウエンはオダに手渡した。

「何ですかこれは？」

「これはデザインがまだ決まっていない試作機なのだが、このバックルはなんと変身することが・・・」

「気持ちだけで結構です」

オダはすぐさま断った

「何？力作だと思ったのだが・・・ならばこれはどうだ？」

おーウエンは小箱を手渡し、オダがそれを開くと・・・

「これは・・・銃ですか？」

「そうだ、私が発明した魔銃“ジムノペディ”。見た目は大口徑の回転式拳銃だが・・・」

おーウエンは弾丸を手に持ちさらに続けた。

「これは君の固有魔術で使う魔晶石を弾丸に加工したもの、魔弾だ。これを弾倉シンリッダーに装填し、引き金トリッガーを引くだけで銃口から魔術が発動できる。威力の調整も可能。もちろん実弾も使用可能だ。まあデメリットとしては8発しか装填できないが、実弾ならいざしらず、魔術なら

魔弾に込められた魔力が尽きるまで撃てるから連射面からみて特に問題はなからう」

オダはオーウエンの思わぬ贈り物に息を呑んだ。

「いいんですか教授？・こんないいものを頂いて？」

「なに、私からしたら些細な贈り物だよ。未来ある若者に、そして友の将来に栄光あれ」

「未来ある若者ってそんなに年はあなたと変わらないでしょ」

「そんなことは言うな。そうだ！この魔銃に付属した魔道具も作成したのだ、ぜひ使ってほしい」

「変な機能は持っていないでしょうね」

「まずこれは身分違いの恋に落ちた男性が意中の令嬢の元に行くための・・・」

「却下です!!」

その後、日が暮れるまで会話は盛り上がり、そして、まるで今日が今生の別れのように、名残惜しそうにオダは去っていった。

「変！身ーっ！。クソ！全然変わらないじゃねえか！」

あの日から数年後、オーウエンは相変わらず学院のお騒がせ者として知られていた。

今日もいつものような目が死んでいる助手が来ると思っていたのだが、まるであの時の彼のような人物が教え子を連れて研究室にやつ

て来た。

だからだろうか、急に彼のことを、友のことを思い出したのは。短い間だったが、オーウエンにとって初めてといっても過言ではない友といえる男だった。

その後、彼とは会うことが叶わず、当の本人も世間に疎いたため、あれ以降彼の音沙汰は一切聞こえてこなかった。

あの日彼に渡そうとしていたバックルもとうとう完成し（機能面はあの時にもほとんど完成していたのだが・・・）、本来なら彼に最初に着けてほしかったバックルは、現在助手である男性教師が身に着けていた。

「へん、しいいん!!!」

「そうだ、その調子だ！・・・あと今思い出したんだが、変身する呪文は『変・身！』ではなく『瞬・転！』だったわ。すまんなグレン先生」「ぶん殴るぞー！テメエ!!!」

今日もオーウエンの研究室は賑やか？である。

3話

あの事件から数日後、オダと先輩は上官に呼ばれた。

「まさか二階級特進の上で俺はレザリア方面へ、オダ君は中央に異動とはな」

「俺たちなんかしましたっけ？」

「まあ明らか先日件の件だろう。しかもオダ君は明日にも帝都司令部へ出頭とは、ただ事じゃないな」

オダと先輩は先日の件に関しての評価ということで昇進、異動が決まり、午後の業務は休んで荷造りをするよう上官に言われた。

「はあ、きな臭いな」

「どうしたんですか、先輩？確かに先輩はレザリア方面へ異動という一見すると左遷ですが、将来の国境警備隊のエリート街道まっしぐらじゃないですか」

国境警備隊にとって階級が昇進してからのレザリア国境方面への異動というものは、キャリアコースの一環である。

現在の幹部も昇進してからレザリア国境方面へと配属されている。彼の将来は約束されたも同然なのだがどうも顔が浮かない。

「いつも通りだったらよかったんだが、今回はイグナイト家が関わってていそうなんだよな」

「そんなに怖いんですか、イグナイト家は？」

市井出身のオダからしたら特に何の違和感も持たないが、仮にも貴族階級の端っこである男爵家出身。

しかも継承権のない妾の子である先輩だとしても、貴族社会のなにかを感じたらしい。

「俺ん家は貴族階級で言ったら弱小中の弱小なんだけど、親父が運よくイグナイト家の派閥に入っているからな。だからよく悪い噂が聞こえてくるんだよ。なんでも政敵を蹴落とすためにはどんな手段も

問わないとか、実績を得るためには味方さえも生贄にするとか、な」
「あ、あの二人もそんなに手を汚しているんですか？」
「まああの二人はまだ当主じゃないからな。当主から命令されて行動に移すことはあるかもしれないけど、まだ命令する立場にはなっていないだろう。一見すると普通の女の子に見えるけど彼女らも当主になると、イグナイト家のためならどんな手段でも実行するんだろな」

先輩が言ってからか、オダも不安を感じ始めた。

「先輩。俺、貴族の連中が嫌というのも理由の一つで辺境で働こうと決めたんです。だから、俺の中央勤務と先輩のレザリア方面への異動、交換しませんか？」

「残念だなオダ君。俺も貴族の連中は嫌いだ。この機会に貴族の連中とお友達になってきたらどうだ？」

帝国国民なら誰もが憧れる、陛下が御座る帝都オルランドでの勤務。

その憧れはこの二人にはどうやらないらしい。

二人はいつものように言い争いながら帰路に就いた。

「じゃあなオダ君、今度会うときは君をこき使う立場になっておくよ」
「その言葉、そっくりそのまま熨斗をつけてお返ししますよ」

その晩、帝都へと向かう夜行列車に乗るオダを先輩が見送りに来てくれた。

「まあなんだ。改まっていると恥ずかしいんだが……。この1年はとても楽しかったよ。まあオダ君ならどこにいても活躍できるだろう。帝都にいつても元気だな」

「先輩……」

いつもならお茶らけている先輩が真面目に話すので、オダの涙腺が少し緩んできた。

「ではオダ君さうばだ。また会おう」

「はい、先輩もお元気で」

翌日、帝都オルランドに着いてから休む間もなく、オダはアルザーノ帝国国境警備隊司令部へ出頭した。

「オダ一等警備士。君には帝国宮廷魔導士団へと転属してもらおうことになっている」

「……はっ！」

帝都に着いてすぐ呼ばれたと思っただけならまさかの国境警備隊をクビ宣告である。

「ちよ、ちよと待つてください。俺……いえ、私の所属は国境警備隊、つまり法務省管轄下です。法務省の他の組織への異動ならまだわかりませんが、宮廷魔導士団といえば国軍省直属。つまり完璧に管轄外じゃないですか！」

国境警備隊ということからよく国軍省の管轄下と間違われることが多いが、国境警備隊は警察などと同じく治安維持のための組織であるため、警察と同じく法務省の管轄下にある。

オダは抗議すると長官が話を止めた。

「オダ一等警備士。君は我が国の省庁における縄張りについてよく理解していないらしい。だから君に教授してあげよう。我が国の軍、警察といった国防・治安維持に関わる活動はすべて現女王府国軍大臣兼

国軍省統合参謀本部長アゼル・ル・イグナイト卿が生家、イグナイト家の強い影響下にある。国境警備隊は準軍事組織、つまりイグナイト家の影響下にあるのだよ。これでわかったかい？君が国境警備隊から宮廷魔導士団へと転属されてもおかしくない理由が」

オダは事の大きさにあっけにとられたが、すぐに反論した。

「しかし私は軍人ではありませんし、軍の訓練にも参加したことのない素人です。そんな私が軍の中でも精鋭の宮廷魔導士団に配属なんて無理かと」

「謙遜はいいよ、オダ一等警備士。君は去年の新人合同訓練レクイレイションでその精鋭の宮廷魔導士を圧倒したじゃないか。イグナイト卿もこれには驚いていたよ」

クソ、あの時の黒歴史を覚えているなんて。

オダは昨年行った新人合同訓練レクイレイションでの振る舞いを今ようやく後悔した。

「あれは全員新人であり、アルザーノ魔術学院首席である私に魔術戦に関してアドバンテージがあったからです。褒められるものではありません」

「知っているかい、オダ一等警備士。宮廷魔導士団の新人の多くは他から配属された魔術戦の猛者達だ。君はその猛者を圧倒したんだ。実力は証明されてる」

まさかそんな裏があつたとは。

どうりで動きが他の新人と比べていいはずだ・・・じゃなくて！

「しかし1年のハンデがあります。実戦で戦うとなると・・・」

「なぜ実戦配備と勘違いしているんだい、君は？」

「え？」

どうやらお互いに齟齬があつたらしい。

長官はオダを見て辞令を読み上げた。

「オダ一等警備士。宮廷魔導士団への異動を命じ、本日から宮廷魔導士団特務分室元室長、リディア・イグナイトの護衛任務を命ず」
護衛なんて書いてあるが、まあ彼女の付き添い人のようなものだ。気合せず励みたまえ」

長官はオダに辞令を手渡すと、もう用はないようで、部屋に呆然と立っているオダを残して立ち去った。

4話

パアン

乾いた音が二人しかない夜の室内に響き渡った。

一人は女王府国軍大臣兼国軍省統合参謀本部長にして当代の紅焰公アゼルⅡルⅡイグナイト。

一人は帝国宮廷魔導士団特務分室室長にして次期紅焰公リディアⅡイグナイト。

アゼルにとって嫡子であり、次期後継者のリディアを実の父親がしてはいけない、まるで虫けらを見るような目で見つめていた。

「見損なつたぞ、リディア。貴様はあの出来損ないや混じり者と比べ優秀だと思っていたのだが……。それはどうやら私の勘違いのようだったな」

「……」

アゼルの言葉に何も言わないリディア

「なぜだ？なぜあの混じり者を助けるために禁じ手である」ファイニース 大終炎”
を使用した？使用すると魔術師としての寿命が尽きることを分かっ
ておきながらなぜ使用した？まさか腹違いの、混じり者である妹を助
けるためだとは言わないよな？」

「……妹を助けるために使用しました」

パアン

それを聞いたアゼルはもう一発リディアを叩き、さらに首を締めあげながら続けた

「キサマは馬鹿か！キサマより無能で、庶子の、赤い血の混じった、イグナイト家の方が一としての予備として迎えたアイツを救うために、次期後継者であるキサマは、魔術生命を絶つたというわけか！」

「うっ……は、はいっ……」

リディアの答えを聞き、呆れ、怒り、侮蔑の感情が入り乱れたアゼルは、リディアを放り投げた。

「今すぐにもキサマをなぶり殺しにしてやりたいが、あの出来損ないと違い、キサマはすでに知れ渡っている。先日の事件からすぐにキサマが死んだらあらぬ疑いがイグナイト家にかけられるだろう……。クソ！こうなったら二人まとめてあの時に死んでくれたらこんな苦労はしないのだから！いや、そもそもあの予備をキサマが見捨てていればこんな一大事とはならなかったはずだ！」

およそ実の父親が吐く言葉ではないことを話すアゼルに、リディアは何も言わない。

「辺境の修道院にて療養中と話を流す。キサマは追放だ！二度と顔を見せるな、さっさと消えろ！」

「……失礼しました」

リディアが去ったあと、アゼルは一人で椅子に座り今後のことについて考え始めた。

「まさか優秀だと思っていたのがあんな大馬鹿者だったとは。予備のアイツに対してはおかしなことを考えさせないようになんとかしないといけない。そんなことより……イグナイト家最大の禁呪を他人に見られてしまったことをなんとかしなければ」

アゼルの手元にある書類には、現場に一番最初に到着し、おそらく大終炎をみたであろう二人の名前が載っていた。

「消すには二人まとめて消すより一人ずつ消した方が時間はかかるが
フェイス 確実だ。まず一人は・・・なるほど。C級軍用魔術の詠唱に3節もかかる無能か。コイツはレザリア方面へ配備させて事故死に見せかけて消すとして・・・もう一人は厄介だな」

アゼルは一人をレザリア方面へ異動させる辞令を書き、次の書類を手持った。

「オダ・・・ただのオダ、名無しか。ふん、孤児なんていう身分の低い男が彼のアルザーノ魔術学院を首席で卒業するとは・・・全く嘆かわしい。教導省の奴らは一体何をやっているんだ」

アゼルはさらに書類を読み進める。

「首席卒業は問題ない。まあ気になる点をあげるなら彼の魔女と親交が深いことと主席卒業の知名度だけなのだが・・・。それよりもこの新人合同訓練の結果だ。まさか学院を卒業したばかりのただの若造レクイレイションが、隊を組まず、ソロで勝ち残るとは・・・。終了後の非公式私の模擬戦闘でも、彼の宮廷魔導士団を相手に多対一で圧倒する・・・コイツは危険だな。リディアと一緒に処分・・・いや、可能であればこちらに引き抜くか」

そう今後のことを画策しながら、アゼルはオダに対し、リディアの護衛任務に就く辞令を作成した。

幕間2

帝都オerland郊外、軍の演習地には今年新たに任官された、軍、警察、国境警備隊、宮廷魔導士団の新人ルーキーが集められた。

毎年恒例、各組織の新人研修期間が終わる時期に行われる新人合同訓練レクイレイションである。

「・・・なぜ毎回こんなものに参加せねばならんのだ」

そう呟き、彼らを見下ろしているのは女王府国軍大臣兼国軍省統合参謀本部長、アゼルルルイグナイト卿。

多忙な日々を送っている彼といえども、この訓練が国軍省主催なため、毎年冒頭のみは現れている。

この後いつも通りすぐ帰るのだが、そんなことは知らない新人たちルーキーは是非自分の顔を知ってもらおうと意気込んでいた。

「リディアよ、後は頼んだぞ」

「はい、父上」

合同新人訓練、開幕である。

今回の訓練で周りから注目されている新人ルーキーがいた。

その名はオダ、それもそのはず彼のアルザーノ魔術学院を首席で卒業した逸材である。

そのため本来なら羨望の眼差しで見られるはずだったが、名誉

ある宮廷魔導士団に入らず、この場で最も格が低い国境警備隊に入隊した変わり者とし、周りからはもちろん身内からも浮いていた。

「諸君、傾注！」

この場でもっとも階級が高いであろう将校が話し始めた

「諸君らもすでに聞いていると思うが、今回の訓練内容は生存戦だ。サバイバル期間は5日間、生き残ることが条件だ。相手を死なせないのならばどんな手を使っても良い。一人で参加するのも、部隊を組むのも構わない。ただし部隊の人数は分隊規模の10名まで、そして部隊で参加するものは、指揮官が討たれたらその場で全員脱落である。これを踏まえて部隊を組むものはこの後本部まで部隊人数を申請すること、一人で参加する者を同様だ。以上だ。では諸君、明日に備えて準備したまえ」

話しが終わると、皆は一斉に生き残りをかけて部隊を集め始めた。もちろんオダは誰からも誘われず一人である。

「この子一人で参加する気？正気なの」

この訓練の責任者の一人であるリディアが申請書を捲っていると、ルーキどこの部隊にも参加しない例の新人の書類を眺めていた。

「彼は首席だけど・・・それで乗り越えられるほどこの訓練は甘くないわ。特に宮廷魔導士団と当たったらどうなるか」

彼女は不安を覚えたが、既に賽は投げられていた。

訓練初日

広大な敷地を有するこの演習場といえども、全員が一堂に会した初日は至る所で魔術戦が行われていた。

一人で参加しているオダはというと・・・

「ふう・・・もう少しでバレるところだった」

絶賛隠れん坊の真っ最中である

このような作戦は他の参加者からは弱腰と見られるが、監督者目線で見たら評価の高い作戦である。

なぜならこの訓練の達成目標は生き残ること、多くの敵を倒すことではないからだ。

オダは初日から3日間まで隠れ、逃げに徹することで、一人ながら生き残ることが出来た。

4日目

ここまで来ると新人という名を被った天才か、魔術ギルドや魔導省、軍から帝国宮廷魔道師団へ入団という名義上新人と扱われている猛者しか残っていないかった。

そして、ここまで残っている多くの者は部隊を組んでおり、一人^{ソロ}で参加していた者は全て退場しているはずのだが、逃げに徹していたオダはなんとか生き残っていた。

「君が例の首席か・・・悪いがここまでだな」

スリーマンセル　ワン・ユニット
三人一組・一戦術単位が三個、指揮官一人という教科書通りの分隊がオダの目の前に展開されていた。

この部隊はおそらく軍から宮廷魔導士団へ入団した手練であり、実力も全員がC級相当の腕の持ち主である

「悪いことは言わない、降伏したまえ。いかに君といえども一人で分隊を相手では勝ち目が見えないと思うのだが？」

その答えに対し、オダは拳銃ホルスターから魔銃“ジムノペディ”を手に取り、拒否を示した。

「まったく・・・勇敢と蛮勇をはき違えているようだな。総員、攻撃開始」

指揮官の命令により攻撃が開始した

灼熱の炎が、凍て付く冷気が、雷閃がすさまじい勢いでオダを襲う、万事窮すかと思われたその時

敵の魔術をすべて相殺してしまった。

「な、なんだと！」

驚くのは無理もない。

なんせ一人で分隊の攻撃をすべて相殺させるなど本来ならあり得ないことが目の前で起きているのだから。

おそらく20、いや30以上の予唱呪文ストックを、すべて連続起動ラビッド・ファイアさせても一人で全て防げるかどうか分からないだろう。

彼らは魔術に精通していることから、このことを理解してしまつた、ありえない、と。

そのような超人的な行為を、卒業して間もない目の前の新人ルーキーがしたことには驚き、混乱していると、敵が浮足立っているのを前に何もしたわけがなく、僅か57秒、1分も掛からず、一人で分隊を撃破した。

「嘘でしょ……」

遠目の魔術で覗いていたリディアはこの結果に驚愕していた。

ここ3日間例の新人ルイキーが現れなかったため、すでに脱落したと思っていたが、思わぬ結果に口が閉じない。

予唱呪文ストツクに関しては彼が持っている魔銃だとリディアは判断した。

リディアの同僚にも同じような凄技をする仕事中毒ワーカーホリックの執行官がいるため、出来ないことはないのだろうが、学院を卒業したばかりの新人ルイキーにそんなことは出来ない結論付けた。

それよりも彼の戦闘慣れの異常さに戦慄を覚えていた

まるで未来が視えているかのように常に次の最善手を迷いなく移し、最短で遂行する。

熟練の兵士でも僅かな者にしか出来ないことを、学院を卒業して間もない彼が出来るなんて本来ありえないのだ。

一体どこで学んだのか？それともこれが才能だろうか？

とんだ新人ルイキーが現れたものだ、そう思っているとすでに彼は移動したようでその場からいなくなった。

新人合同訓練終了

あれ以降、戦闘を避けたオダは他の部隊とともに生き残れた。

逃げに徹し戦闘を避けるその手法には他の参加者からは異議も唱えられたが、監督者からはこれこそが生存戦サバイバルであると評価され、一同の前で褒められた。

元来自分の出自が原因でこのようなことは経験してこなかったオダにとって、これが一番の痛手であったのかもしれない。

1人で参加し、最後まで生き残るということを初めて成し遂げたこの前代未聞の結果に多くの人が驚愕したが、その僅か1年後、軍士官学校を歴代最短で卒業し、14歳にして帝国宮廷魔導士団に入団した赤髪の女性魔導士がなんと一人で敵を全て打ち倒して生き残るという偉業を成し遂げるにより、この記録が色褪せることは誰も知ら

ない。

その翌日、オダがあの時相手した部隊の一人に連れられ、帝国宮廷魔導士団の本部、業魔の塔へと足を運んだ。

どうやって分隊規模の攻撃を掻い潜ったのか話を聞かせてほしいと必死に言われたのでついに行くことにした。

「この部屋にみんながいるんだ、入ってくれ」

「ああ分かった・・・だがなぜ鍵を閉めるんだ？」

「!!」

部屋に入ると否やすぐに後ろの扉が閉まる映像が視えたオダは案内してくれた人に聞いた。

「へえ？どうやら勘だけは良いようじゃないか。さすがは生存戦^{サバイバル}を闘わずして生き残ったってわけか」

部屋の中から声が聞こえたので見ると、あの時の指揮官と隊員が完全武装でオダの目の前に立っていた。

「いったい何の用だ」

「なぜ国境警備隊みたいな奴に負けたんだ？と考えてな。どうせあの魔道具みたいな銃のおかげなんだろう？あれからお前の評価はうなぎ登りだ。それを祝って俺たち流の歓迎をしてやらないとな、と考えてな。何、この部屋では中は一週間たついても外ではたったの1日

しかたっていない。さあ、魔道具なしで自分が持っている本来の実力で思う存分やり合おうではないか！」

そう言うのと彼が率いる部隊は魔術を発動させた

「刻隔ての間」の使用を出したかつて？私は出してないわよ」

リディアの元にこのような連絡が届いた。

気になったので見に行くと、例の新人が部屋から出てきた

「ちよつと君、この部屋は宮廷魔導士以外立ち入り禁止よ。どうやって入ったの！」

「どうしてといわれても・・・中にいる人達に聞いてください」

リディアは部屋の中を見ると、死屍累々に重なっている魔導士がいた

「これ・・・まさか、あなたが！」

「本人に聞いてください」

そう言うのとオダは足早にその場から立ち去った。

リディアは追いかけて、問い詰めようとしたがまずは彼らの手当が先と考えた。

その後、両者とも多忙な日々を過ごす中、あの日顔を合わせたことは記憶の彼方へと追いやられたが、その時は1年後に再び会い見えるとは思ってもいなかっただろう。

5話

「こんにちは院長先生、お久しぶりです」

「おや、オダ君じゃないですか。元気にしていましたか？」

久しぶりにあつた院長は、元軍人とあつてか昔から変わらない筋骨隆々の体つきではあつたが、年には勝てないよう髪は薄つすらと白髪が目立ち始めた。

オダは、リディア・アイグナイトの護衛をせよ、との辞令が渡されたその後、空いた時間を利用して実家である孤児院を訪れていた。

いかに帝国の政治経済の中心地であるオルランドとはいえ、光があるところに影がある、というように外延部は貧民街と化しており、中心部の静寂さ、華やかさとはかけ離れているところに孤児院はひっそりと建っていた。

「髪は少し伸びたようですね。背も伸びましたか？体つきもすっかり良くなりましたね」

「髪は伸びましたが、背はそんなに変わっていませんよ。まあ毎日鍛えているので良くなつてもらわないと困ります」

琥珀色の瞳と同じ色彩、いや、それに暗い灰みの茶色がかった髪は、肩にかかる程度まで伸び、後ろで軽く纏めている。

身長も院長と同じ180cm台に到達してからはそんなに伸びていないと感じているが、他人から見たら少しは伸びているのだろうか。

体つきも学生時代の線の細い体と比べて引き締まり、大人の体格へと変わっていった。

「今年の新人合同訓練以来ですかね？今回はいつまでいるんですか？」

「すいません。実は仕事を立て込んでいてこの後すぐに発たなければいけないんです」

「おやおや。そんなに国境警備隊は忙しいのですか？」

「いや・・・実は今回国境警備隊から宮廷魔導士団へと転属になりました」

オダの報告を院長先生が聞くと目を見開き、彼の手を取り喜んだ。

「やったじゃないですか！オダ君。あの宮廷魔導士団に入ることが出来るなんて。こんな機会めったにないですよ」

「でも今以上に忙しくなります。それに孤児院にも足を運べなくなりますし」

「気にしないでいいんですよ、オダ君。今でも多くのお金を送っているんですし、孤児院のことは気にせず少しは自分にもお金を使ってください。自分を大切にして始めて他者にも目を配れるんですよ」

「はい院長先生」

その後、二人はしばらく雑談に耽っていた

「そういえば食べる時間はあるのですか？私特性の咖？は」

院長が話しかけたことで気づいたようで、いつの間にかこんなに時間が経っており、待ち合わせの時間が刻一刻と近づいていた。

「もう時間が厳しいので今度にします。そういえば子供たちはどこにいったんですか？」

「ああそういえばオダ君が来たのはちょうど昼食後のお昼寝の時間でしたね。いつもはもっと早く起こしていたんですがどうやらオダ君と話し込んでいてすっかり忘れていたようです」

院長先生・・・俺としては嬉しいんだけどガキどもにとってせつかくの遊びの時間を昼寝で過ごしてしまうとは。

オダは遊び盛りの子供たちにすこし同情した。

「そろそろ子どもたちも起き始めると思うのですが・・・」

「あく兄ちゃんだ！」

院長が言い終えそうなきにちょうど起きたのか、子供たちがオダ

に向かって駆け寄ってきた。

「兄ちゃん兄ちゃんいつまでいるの?」

「お土産は?」

「魔術教えてよ」

一斉にオダに向かって話しかけ、彼が少し困っているのを見かねたのか、院長が子供たちを諫めた。

「ごらごら。オダ君はお仕事の合間に来てくれてもう帰るんですよ。迷惑をかけないように」

「え〜つまらなくい」

いや、院長先生が起こしていたら少しは遊ぶ時間も作れたのだが……。

まあそれは言わないのが愛嬌というものだ。

「そういうことだ、悪いなまた今度だ」

「またね〜兄ちゃん」

「ばいばい〜」

子供達の様子を見てオダは笑みを浮かべた

この光景を守っていこう、そう誓い孤児院から立ち去った。

辞令に書かれている集合場所となっているオルランド駅前、帝都の玄関口とあってか、人通りがとても激しい箇所で有名な場所である。ただの観光で利用するなら少し鬱陶しいだけで特に支障はないの

だが、今回は護衛。

護衛として、いまにもどうぞ暗殺してくださいと言わんばかりの混雑さはとても問題である。

本当にここでいいのか？もう一度辞令を見直したその時、

「あの・・・オダさん、ですか？」

後ろから声をかけられ振り返ると、先日国境付近で治療を施した女性がいいた。

まさか・・・

「あの・・・まさかと思うのですが護衛対象者であるリディア・イグナイトさんですか？」

「はい、リディア・イグナイトです」

まさかの護衛対象者本人のお出ましである。

6話

まさかの護衛対象者ご本人のお出ましに、オダは少し狼狽していたが、当の本人はそんなことは気にしていなかった。

「オダさん。今回は本当に申し訳ございませんでした。私の護衛ということで、国境警備隊から宮廷魔導士団へと転属したと聞きました。私事にあなたを巻き込んで本当にごめんなさい」

そう言い、リディア・イグナイトは深々と頭を下げた。

「ちよ、ちよつと。俺……いえ、私は気にしていませんから。頭をあげてください」

腰まで届きそうな鮮やかな真紅の髪と紫炎色の瞳。

そして物腰の柔らかかそうな、優しげな雰囲気纏い、端正なその顔立ち。

周りの人に聞くと大多数が美女、美人と答えるその女性こそが、オダが護衛する人物、リディア・イグナイトである。

無地のロングスカート、無地のカーディガンを羽織り、一見庶民の服装でも、それすらも彼女の美しさを引き立てていた。

そんな彼女がオダに頭を下げているのだ。

彼からしたらたまったものじゃなく、周りからの視線もとても痛く感じた。

「とりあえず駅の中に入りましょうか、リディア・イグナイトさん」

「はい。あとリディアでいいですよ。もうイグナイトを名乗ることはできないので」

そういうと彼女は少し悲しげに眼を伏せ、このように伝えた

「……わかりました。ではリディアさん。行きましょうか」

「はい、お願いします」

目的地である北西部の修道院までは列車で行くことになっている。

もちろん列車を降りてすぐ着くわけでもなく、その後は馬車か徒歩か選ばなければならぬだろうが、どちらを選んでも時間はかかる場所だ。

今日は修道院の最寄り駅まで列車で行き、そこで1泊する。乗降場^{ホーム}で列車を待つ間、オダはリディアにこの予定を伝えた。

「はい、わかりました」

「・・・リディアさん。お願いですから乗降場^{ホーム}から身体を乗り出さないでくれませんか？」

オダの予定を上の方で聞き、興味があるのは駅の中ですと言わんばかりのはしゃぎぶり。

貴族だからなのか駅をあまり利用しないからか、オダがそう思ったことを彼女に伝えると、

「もちろん利用しますよ、特務分室時代も使っていましたし。あとはしゃいでいませんよ」

彼女はこう反論したが、現在進行形ではしゃいでいる様子を見て納得がいくわけがないのだが・・・。

そう思っていると、列車が来たようで二人は予約していた席へと座った。

「では着くまで時間もありませんし、少しお聞きしたいことがあるのですがよろしいですか？」

「答えられる範囲であれば大丈夫ですよ」

電車が出発してしばらくたったあと、暇なものもあるがオダはリディアに質問をした。

「ではまず一つ。なぜ貴族でありながら1等席ではなく2等席なのですか？」

オダは帝都に行くまでの短い間ではあるが貴族社会について、レザリア方面へ異動する先輩から学び、その中でイグナイト家が貴族階級

の上位に位置することを聞いていた。

だからなぜそのイグナイト家の後継者たるリディアの移動がこんなけち臭いのだろうか、不思議に思っていた。

「あくそれはですね。私がイグナイト家から勘当されたからなんですよ」

何でもないかのようにリディアは言った

「勘当、ですか」

「はい。オダさんも先曰いたと思うんですが、あの時私はイグナイト家の禁呪を使用してしまいました。その後遺症のせいで魔力能力を全て失ってしまったんですよ。勝手に禁呪を使用して魔術師としての人生が終わった私は、イグナイト家にとって必要ではないらしいので。ですから私はもう貴族の一員ではないんですよ。今回二等席を取れたのだからって使用人のおかげですし」

おそらくつらい現実なはずなのにそんな素振りを見せないリディアに向けてオダは聞いた

「使用したことに後悔はしてないんですか？」

オダの言葉にリディアははつきりと答えた。

「はい、していませんーと」

その後は他愛のない話が続いた。

やれ私の妹が可愛いだとか、やれ私の妹は努力家だとか、やれ私の妹は素直じゃないだとか・・・あれ、リディアさんの妹の話しかしてないな。

オダはそうのように思ったが口に出さず話を聞いていた。

今日の目的地に着いた2人は予め予約していた宿に入った。

「寝る前に一つ連絡を。私はいつでも起きていますので何かあったら部屋に来てください。あと、あなたの部屋から大きな物音が聞こえた

ら問答無用で入りますので、ご容赦を。では明日も早いのでごゆつくり」

「はい、オダさんもゆつくり休んでくださいね」

護衛がゆつくり休んだらいけないでしょ、オダは心の中で突っ込んだ。

7話

朝になった。

オダは念のため一晩起きていたが、何も起きずに夜が過ぎた。

「おはようございます、オダさん。よく眠れましたか?」

「護衛がよく寝ちゃダメでしょ!」

つい突っこんでしまった。

すると彼女は口元を押えて笑っていた。

「なにか笑うところはありましたか?」

「いえ。オダさんの素の表情はこんな感じなのかなって。移動中は私に対して一步距離を置いていたようでしたし」

そういわれるとオダにも思うところがあつたのか居心地が悪そうにしていた。

「これから長い付き合いになると思うんだしき、呼び方変えてみない? オダ君」

「呼び方を変えるって・・・もう変えているじゃないですか」

「ほらほら私は変えたんだしき、オダ君もね」

「・・・リディア」

「なるほど・・・呼び捨てで攻めてきたか。未婚の女性に呼び捨て、大胆だね。オダ君は」

「あなたが呼び方を変えてみてって・・・いえ、もういいです。早く行きますよリディアさん」

「あ、さん付け禁止」

一晩で何かが吹っ切れたのだろう。

まあ適度に無視すればいいか、オダはそう思いリディアを無視して食堂へと向かった。

朝食を取り、目的地の修道院に向かうため馬車停に行く。

しかし・・・

「え、修道院までの馬車がないんですか？」

「すまんね、兄ちゃん。なんでもえらい貴族様がこの辺で狩りをするっていうんで馬を全部持って行っちゃったんだよ。俺たちもそれは困るって言ったんだけど、その貴族様はふだん俺たちが一日で稼ぐ金の倍の料金を払ってくれたんだ。それに馬を借りるのも2, 3日という短い間だけだし、その日ごとにも同じ額の金を払うっていう気前のいい貴族様でさ。だからここら辺の馬は全部その貴族様が借りてんだ。だから当分は馬車には乗れないよ」

まいったな、馬車でさえ半日はかかる距離を歩いてか・・・俺は何とかなるとしてリディアさんは大丈夫か？

オダは今後の予定に不安を思い、現地の人から説明されたことをリディアに伝えると、

「オダ君私は大丈夫よ。これでも元軍人なんですから」

腕をまくって自信げに伝えた。

いやなぜ腕をまくる必要があるのか不思議に思ったが、オダはそれには言及せずさらに続けた。

「でもリディアさんはまだ怪我が治って間もない時期ですし長距離の移動はあまりよくないんじゃない？」

「私は魔術機能は失ったけど、体の機能は取り戻したわ。あの時受けた傷も誰かさんの治療のおかげですっかり塞がっているし」

「・・・分かりました。ではゆっくりと歩きますので疲れたら言うてくださいいね」

「はーん」

駅から出発して数時間後、二人は人里離れた場所を歩いていた。

「でねーオダ君。イヴったら私にね、ありがとうって言ったのよ。普段は素直じゃなくて本音を滅多に言わないあの子がありがとう、よ。凄く嬉しくて感傷に浸りたかったのに、あの時アイツらが乱入してきて・・・」

薄々気づいていたがこの短時間でオダは確信した。

本人は自覚していないがリディアは筋金入りの姉妹愛だ（シスコン）ということ。

全くよく話題が尽きないな、オダがそう思っていると・・・

急に映像が視えた。

足元の木の枝をリディアが踏んだ直後、目の前が一瞬にして血で真っ赤に染まった光景が。

狙撃だ。

周りを警戒していたオダが気づかないとなると、よっほどの遠距離から狙撃をされたのだろう。

狙撃手は1ミリも逸らさず二人の後頭部に命中させ、二人が倒れた後も確実に仕留めるためか二発、三発と二人の急所を射抜く。

オダが最後に見たのはリディアの周りが血で染められ、背徳的な、何とも言えない光景だった。

その光景を見た直後、オダの視界は暗転する。

映像はそこで途切れ、二人が歩んでいる目の前には先ほど視た木の枝が落ちていた。

リディアが木の枝を踏みかけるその瞬間、

「リディアさん！すみません」

「え、きやあー！」

オダはリディアを横から押し倒し、その反動で近くの茂みの中に潜り込むとほぼ同時に、先ほど二人が歩いていた場所には一筋の閃光が通り過ぎていった。

瞬時に遠目の魔術を発動し、狙撃された方向を見ると、薄っすらとだが二人の人影が見える。

この状況から考えると狙撃手スナイパーと観測手スポッターだろう。

オダの視線を感じたのだろうか、二人は素早くその場から立ち去った。

この超長距離を狙いすまして標的に当てる技術、標的を外すと分かるといふや、すぐに撤退を決断できる判断力。

おそらく、いや明らかに専門家プロの仕事だ。

二人はあの時確実に死んでいた、俺の異能がなければ。

「な、何」

「リディアさん、落ち着いてください。敵襲です」

いま俺たちは襲われている、その現状を理解すると彼女のその後の頭の回転はとても速かった。

さすがは元特務分室室長、魔術能力を失っても数々の修羅場を掻い潜ってきたその戦闘センスは未だ健在のようだ。

「どこから狙撃されたか分かる、オダ君？」

「ちようど真後ろ、距離でいえば約2、3千メートルといったところですかね。おそらくさつき落ちていた木の枝で距離感を図っていたとしても、この距離からあんな精密な狙撃をするなんて、一体何者でしょうか？もう去っているようですが、おそらくあの丘から狙撃してきたようです。見えますか？」

オダはリディアに魔術で視覚を共有しようとしたが・・・

「ごめんなさいオダ君。私魔術能力を失っているから共有出来たとし
ても見ることは出来ないの。もちろん肉眼でも見えないわ」

オダは彼女の置かれている状況をすっかり忘れていた。

「すみません」

「いいのよ、気を使わなくて。それよりも周りの敵に集中して」

そう言われ、周りに索敵用の魔術を展開する。

「どう？敵は？」

オダは索敵用の魔術を終了させた。

「リディアさん、囲まれています」

そう言い終えると周りから顔を隠した数人の魔術師が現れた。

8話

「貴様がオダだな」

襲撃者が声を掛けてきた。

「違いますといたらどうなるんですか？」

「殺すだけだ」

「ここは仕方がなく相手の問いに答えるでしょう。」

「そうですがあなたは？俺の知り合いにはいきなり狙撃で挨拶をしてくる人はいないと思うんですが」

「二度目で死ねばそれでいい。もし死ななければ貴様を勧誘しろと言われた」

「へえ、ちなみに誰に頼まれたんですか？」

「答えると思っているのか？」

一縷の望みをかけ、話しが長引かせることで隙が見つかると思っていたのだが、どうやらなさそうだ。

「勧誘してくれるのはありがたいのですが、俺と彼女はこれから行かなければいけないところがあるので退いてくれませんか？」

「勧誘には乗らない、か」

男はオダの返事を聞き、臨戦態勢になる。

今や一触即発、どちらが先に動くか、お互い腹を探っているその瞬間。

意識外から腹部に鋭い衝撃を受けた。

オダにとつては全くの不意打ち、死角からの攻撃。

自己透明化と音遮断の呪文の付エンチャント呪文という、完璧な隠密潜行からの奇襲。

ここまでされるとたとえ精鋭の宮廷魔導士団が索敵魔術を展開したといえども絶対にこの奇襲を防ぐ手段はない。

話しを長引かせていたのは、オダに気づかれず背後に部下を展開させるための時間稼ぎだったようだ。

まんまと相手の術中に嵌り、腹部を射抜かれたオダはその場に倒れ込み、意識を手放した。

そこで映像は終了する。

右後方に一人、左後方に一人、距離は約20メートル。

これなら間に合う、そう判断し、オダは手の中に隠していた魔晶石を発動させた。

正義の魔法使いを目指している男の子に頼み、彼の固有魔術オリジナルを刻印してもらったその小さな魔晶石。

「術式起動 愚者の世界」

半径50メートル以内の領域では魔術起動を完全封殺するという魔術師にとって天敵ともいえるオリジナル。

先に発動された以上、いかなる魔術師でもその領域下では魔術を行使することが出来なくなる。

予唱呪文ストックの軍用魔術による魔術射撃で標的を射止める矢先に、魔術が封じられたことに焦る二人だが、此方の場所はまだ割れておらず、もう一度立て直そうとしたその瞬間、

銃声、銃声

二発の弾丸が二人の目尻に命中した。

絶対に気づかれるはずがないのに、そう思いながら背後の二人は意識を失った。

目の前の男も同じことを思っていたのだろう。

自分の部下の居場所を完璧に気づかれていたこの事実には驚愕したが、さすがは暗殺者暗殺者。

オダに反撃の一手を与えないように、すかさず呪文を唱え、殺そう

としたが、

「ま、魔術が発動しないだ!!!」

愚者の世界

もちろん目の前にいる彼らが固有魔術の影響を受けていないはずがない。

そして魔術が発動できず混乱に陥っている敵を、オダは待つほどお人よしではない。

銃声が木霊した。

実弾による8連装全弾掃射。

目の前のこの集団の隊長格であろう人物以外の急所を魔銃ジムフベデーで射抜き、速やかに無力化する。

このあまりにも素早い出来事にリディアも目を見開き、驚いていた。

「さて、じゃあゆつくり話そうか」

奥歯に仕込んでいた自決用の毒を取り出し俺は尋問を開始する。

「オダ君、尋問は得意なの？」

「いえ、初めてですよ」

リディアが尋問の経験があるのか聞いてきたのでオダはしたことがないと答えた。

この返事に、目の前の男は少し安堵した表情を浮かべた。

「でも俺以外の人は得意なんですよね」

「俺以外って、私もそんなに得意じゃないんだけど」

リディアがそう言うのと、オダは男の前に魔晶石を取り出し起動させた。

「術式起動 ブリー ト 精神崩壊 マインド・ブレイク」

魔術学院で変態講師と名を馳せた精神系魔術の大家である教授に頼んで刻印してもらった魔晶石。

それを起動させ、一旦奴の精神を攻撃し、精神状態が脆くなったところで尋問を開始した。

オダが尋問を開始しようとする同時刻、約4千メートル離れた先、遠目の魔術で見える限界間際の場所から先ほどの 狙撃手、観測手 二人が眺めていた。

「撮れたか？」

「ええ、撮れましたよ。しかし加勢に行かなくていいんですか？」

「ターゲット 標的の実力を見ただろ、あれは俺たちじゃ手が出ん。俺たちはこの情報を主人に渡すことが最優先だ」

「了解」

彼が手に持っている魔晶石。

その中には先ほどの戦闘の映像が記録されていた。

オダが情報を得ようとしているその時、オダ自身の情報も流れようとしていた。

「……」

尋問を終え、すぐにその場を離れた二人だが、口を閉ざして沈黙したままだった。

それも無理はない。

リディアについては暗殺させるために修道院へ送ったこと。

先日の事件に居合わせたオダについては引き抜くか、出来なければ殺せという命令が出ていること。

追手を叩きのめした二人はこれから逃げるか、死ぬかを選ばなければならぬ。

最初に狙撃をしてきた二人はおそらく今頃今回起きたことの報告を依頼主アゼルにしているとところだろう。

早く次に移らないと新手が追ってくる。

「……オダ君、これからどうしよつか？」

沈黙を破ってリディアが話しかけてきた。

いつもの元気がない。

それもそのはず、実の父親に命が狙われているのだ。

余程の衝撃であろう。

オダも命を狙われていることに代わりはないが、リディアほど未だ追い込まれてはいなかった。

「そうですね……このまま修道院に行くのは危険すぎる。なんせ殺すために貴方を修道院に送っているんですから。罨アサやさつきとは比べ物にならない凄腕が手をこまねいて待っていてもおかしくはない」

オダはこのまま修道院へ行くことには反対した。

「じゃあどうするの？ 修道院に行っても殺され、帝都に戻っても殺される。もう私たちの居場所なんてないじゃない……」

確かにリディアの言う通り、これはいわゆる詰チエツクみと言う奴ではない

のか。

この状況を打破するにはどうすべきか。

イグナイト卿が送ってくる魔の手を子ども扱いできるそんな魔術師が・・・いた。

「リディアさん。フェジテに行きます」

「フェジテ？あの魔術学院がある所になんで行くの？」

「あそこには大陸最強の魔術師がいる。それでわかりませんか？」

この状況を打破するにはあの魔女の協力を得るしかない。

オダは座っているリディアの手を引き、フェジテへと歩み始めた。

9話

二人はフェジテへと向かった。

どこにイグナイト卿の目が光っているかわからないので交通機関を利用することはまず不可能。

大通りももちろん不可能となると、険しい道しか残っていない。

それよりも現在いる帝都から遠く離れた北西部の辺境から帝国南部のヨークシャ地方に位置するフェジテまで一体何日かかるのだろうか。

もちろん歩いて移動するとなるととても日数がかかるため、人気が少ない時間帯に魔術を使って距離を稼ごうと考えたが、身体強化系の魔術とは相性の悪いオダがそれを使用することでリディアに怪我をさせてしまう恐れがあるため、結局徒歩で移動となった。

「リディアさん、大丈夫ですか？」

「大丈夫、と言いたいところだけど、少し疲れたかな」

あれから約1週間、2人は途中で遭遇した追手を追い払い、何とか北西部のリリタニア地方を抜け、南部のヨークシャ地方まで着くことが出来た。

ここまで来たら1週間もかからずフェジテに着くだろう

本来なら1週間でここまで着けるはずがない。

ではなぜこんな短時間でここまで来れたかという、なんとリディ

アがオダを背負い、距離を稼いだからだ。

これまでの戦闘描写から誤解を生んでいるかもしれないが、彼は元々国境警備隊員、軍人ではない。

追手を撃退できているのも、異能、固有魔術、魔銃による僅かな^{アドバンテージ}優位性があるからだ。

話を戻すが、特殊部隊員でも軍人でもない彼がこのような強行軍を遂げる体力があるわけなく、本来なら途中で歩みが遅れるはずなのが、彼の横にいるのは軍の中でも精鋭と謳われる特務分室に所属していたリディア。

魔術能力は失ったが、軍で鍛えられた身体能力を持っている彼女はオダの様子を見て、彼を担いで距離を稼ぐことを申し出たのだ。

リディアからしては彼のことを思い申し出たのだが、当の本人にとっては男の沽券に関わることなので丁重に断ったのだが、体力が落ちている時に追手が来たら対処できなくなるなどの理由で押し切れ、オダを背負い、物凄い疾さで悪路を駆け抜けた。

貴族の淑女に成人の男性が背負われるという前代未聞の出来事として、オダの胸に新たな黒歴史として今回のことが刻まれることとなる。

「少し町に買い出しへと行ってきます。何か欲しい物はありませんか？」

「んゝ下着」

「俺に社会的に死んで来いと？」

「冗談よ冗談。でも服は欲しいかな。汗かいたままだと嫌だし。あと出来れば香水も欲しいかも」

「わかりました」

やはり元軍人とはいえ、リディアもやっぱり女の子のようで、汗を気にするのだろう。

頼まれた物を買いに町に行く。

魔術で変装したオダは買い出しも終わり、戻ろうとしたその時、町中はやけに賑わっていた。

いつもなら通り過ぎるのだが、なぜか腹の虫が収まらず一度見に行くと・・・

「号外！号外！あのイグナイト侯爵の娘、リディア・イグナイトが誘拐されたぞ!!」

オダは配っている号外をひったくり、その場から離れて読んだ。

・リディア・イグナイトは療養のため修道院へと出発するも、修道院から未だ着いていないと連絡

・その連絡を受け数人の魔導士が修道院近辺に搜索に行くも行方不明に、その後死体として発見

・当局はリディア・イグナイトに付き添っていた宮廷魔導士オダという人物が誘拐したと判断

・動機は不明のため現在彼の近辺を捜査中、すると前日に彼が育った孤児院の院長と接触していたことが判明。

・当局は孤児院へ調査に向かうも火事により院長を含む約13名全員の死亡を確認。オダによる口封じの可能性あり

号外を読み終わると、急に喉が痛くなった。

そして呼吸も出来なくなり、誰かの叫び声が聞こえた。

オダは街中で誰かが騒いでいるのだろうと思ったが違った。

あまりに激しく自分の喉が痛むので漸く気づいたのだ。

その正体が叫び、泣き、この現実を受け止めきれないオダ自身のこと。

「イグナイト家には黒い噂をよく聞くからな」

頭の片隅にあった記憶が甦る。

あの時彼の先輩が放った言葉だ。

政敵を潰すためなら、成果を残すためなら、自分の障害を排除する

ためどんな手でも使う。

オダはあの時感じなかったイグナイト家の理不尽さ、傲慢さに大事なものを失ってから初めて気づいた。

「遅いなくオダ君。なにかあったのかな」

オダが町に買い物に行ってからかなりの時間が経った。いつもなら帰ってきている時間帯である。

何かあったんじゃないか、そうリディアは思い立ち上がるが自分の置かれている状況を思い出した。

「そうだ、私魔術が使えないんだった・・・」

オダに会った最初の日、後悔はしていないのか？と聞かれすぐにしていないと答えたリディア。

それは今になっても変わらない。

あの子を、前は助けることができなかつた妹を助けることが今回は出来た。

だから後悔なんかしていない、はずだったのだが・・・

リディアはここ数日の彼の姿を見て申し訳なく思った。

あの場に彼を巻き込まなければ、彼は他の人と同じ平和な日常を送れたはずなのに、今やまるで逃亡犯のような生活だ。

私だけならいい、だけど彼を巻き込んでいることにリディアは心が痛くなってきた。

そう一人で思い込んでいると足音が聞こえる。

周りにはオダが結界を張っており、彼しかここに立ち入ることは出来ない。

オダが帰ってきたようだ。

「お帰り、オダ君。遅かった・・・どうしたの？」

オダの様子を見てただ事ではないと感じたりディア。

オダの手に何か持っているそれをリディアは取り、読み始めた。

「・・・嘘」

そこに書いていた内容は一見すると嘘とは言えないが、二人の立場ではないことが書かれていた。

オダが追撃者を倒したことが、こんな風に書かれるとは。

それよりも一番下に書いていることだ。

少しだけだがリディアも彼の実家の孤児院の話を知った。

その時のオダの表情はいつもと違って柔らかくなっており、それを失った今、彼がどんな心境かわからないリディアではない。

するとオダの口が開き出した。

「リディアさん、本当に申し訳ない。ここからは君一人で行ってくれないか？教授宛に紹介状を書いているから匿ってもらえるはずだ」

オダはお金と手紙をリディアに渡し、立ち去ろうとした。

「ちよつと待って、オダ君」

私は彼の手を引っ張る。

「オダ君が今考えていることはわかる。仇を討つ、そうでしょ？でも行かないで、これは罠よ。きつとあの父上のことだからこの情報を流したら、絶対君が帝都に来ると分かかって流したに決まっている。今までの比にならないくらいの戦力で貴方を迎え討とうしているのよ」

「・・・」

リディアの説得を無視し、オダは行こうとする。

「オダ君。私もあなたと同じ気持ちを知ってるわ。大切な人、守りたい人が失われた気持ちを私も知っている。私も妹を失ったから、あなたの気持ちがあすぐくわかる。だからおかしな言い方を今からするとに許してほしいんだけど」

リディアはひと呼吸おき、さらに続けた。

「何かに頼って。この後に起こる、何か良いことに期待して。その何かは今わからないけどきつとある筈よ。私も妹を失って、何もかも失ったと思った時、これから起きる何かに期待して歩んできたの。何か生きる理由が見つかるかもって。だから」

リディアはオダを後ろから優しく抱きしめ、静かに言った。

「お願い。行っちゃダメ」

しばらくの沈黙の後、オダの口が開いた

「俺にはあそこしかないんだ。アイツらがいないとダメなんだ。そのためにいままで走ってきた。でもそれももう今日で終わりだ、終わりなんだ。今の望みは唯一つ、一つだけだ」

そう言い、オダはリディアを優しく振り解き、歩き出す。

「オダ君！」

リディアが叫んだがオダは振り返らなかった。

幕間3

フエジテへ向かい始めて5日目。

二人はイグナイト卿の追手を逃れて人気のない道を歩んでいた。

「もう大丈夫ですよ、リディアさん」

オダは追手を片付け、隠れていたリディアを呼んだ。

「オダ君・・・大丈夫？少し休んだ方がいいんじゃない？」

「大丈夫ですよ、リディアさん。早く進まないと追手が・・・っつとー！」

リディアを心配させまいと声を掛けたはずが、蹠踉めいたことで飽水と化した。

「オダ君？」

「少し躓いただけです、大丈夫ですよ。さあ先に・・・」

「オダ君？」

なぜだろうか、リディアは笑っているはずなのに目が笑っていない、そんな有無を言わさぬ圧迫感でオダに近づく。

「・・・なんでしょうか、リディアさん」

「今日は休む、いいわね？」

「ですがフエジテまでまだ距離が・・・」

「いいわね？」

「・・・はい」

これが多いの英傑が在籍する特務分室を指揮していた女傑の力、ただの地方で働く一公僕のオダに反抗することなど出来ようもなかった。

歩いた先にある小さな廃屋で休息を取る。

だがなぜだろう、休憩をしているはずが、まるでこの場が尋問室に感じるの。

「で、オダ君。いつからこの状態なの？」

「昨日からですよ、ですから・・・」

「この状態でずつといたの!!!」

驚くリディアが見た先は、オダの足だった。

慣れない戦闘と行軍で足に負担がかかったのだろう。

足の血色は悪く、具合が良くないのは明らかだった。

「大丈夫ですよ、怪我は治療魔術で治りますし、この程度の不具合なんて大したこと・・・」

「少しは自分を大切にして!!!」

オダと出会い、始めて声を荒げたりリディア。

このことにオダは大いに驚いたが、そのことなど気にせずリディアは話を続ける。

「魔術戦において、一つの隙が命取りになるのよ！あなたがいくら魔術戦に慣れていても本職じゃないじゃない！」

リディアの言及に押し黙るオダ。

「そもそもオダ君・・・人を殺したのは初めてよね？」

「!!!」

オダが今まで目を逸らしていたことを突きつける。

「オダ君の前職については私も少し話を聞いたわ。西部方面の国境警備、あそこは他の国境警備と比べて比較的平穏な場所よ。そんなところで働いているオダ君が人を殺す経験なんてしたことがない。現に・・・」

話を止め、オダの目を見つめるリディア。

「オダ君、寝ている時魔されているわよ」

オダは知らない事実を突きつけられた。

「命を賭けた魔術戦、慣れない行軍、そして人を殺める……今のあなたの精神状態はとても不安定よ。そんな状況で次追手と闘うとなると、生き残れるかわからない……これで分かった？今休息する必要性が」

ここまで理路整然と言われると反論する余地はなく、リディアの言う通り休息を取り始めた。

「でも確かに今の行軍速度は不味いわね……」

「そうなのか？」

休憩中今後のことを話しているとリディアが現状を呟いた。

「そりやそうよ。追手からしたら速度が遅い分直ぐに見つけやすいんだから」

「じゃあこんなところで休憩をしている場合じゃ……いえなんでもありません」

リディアの鋭い視線を受けて、言い止めるオダ。

「そうね……オダ君、加速／加重系統の魔術は得意？」

「加速／加重系統ですか？どうして？」

「いいからいいから」

「……まあ学院レベルでしたら習得していますよが」

「よし、じゃあいけるわね」

そう言うとりディアは立ち上がり、体を解し始める。

「あの、リディアさん・・・何をしてるんですか？」

「何って・・・ああオダ君は知らなかったんだ」

リディアは説明をし始める。

「軍直伝、ストレッツチャー負傷者運搬法よ」

説明するところだ。

負傷者に重力系の魔術をかけ、負傷者の体重を軽減させる。

そして運搬者は自身に身体強化系の魔術をかけ、負傷者を運ぶ。

「まあ私は魔術が使えないから、自分でかけてね。大丈夫、私も軍で鍛えられてるから身体強化の魔術がなくてもオダ君を担ぐくらい・・・」
「まてまてまて!!!」

リディアの話を遮るオダ。

「どうしたの、オダ君？」

「つまり？俺は？リディアに担がれて移動するということか？」

「その通り♪」

「ぜつつつうたい嫌だ!!!」

断固拒否、それもそうだろう。

男性が女性に、しかもリディアという美女に背負われて移動するのだ。

普通の感性を持っている人ならば恥ずかしいことこの上ないだろう。

後に残るのは黒歴史という悲惨な現実だ。

「もう、我儘言わないの！このままだと体力が弱まって、追手に殺されてもいいの?」

「っうー!」

「そもそもこんな人気のない道、誰も通らないんだし、誰からも見られないじゃない」

「……でも」

「戦場では小さな自尊心で命を落とすこともあるのよ。オダ君、お願い……」

「……わかりました。ですがリディアさんが少しでも疲れたら降りますからね」

「はーん」

その後リディアは一切疲れを見せず、僅か2日でヨークシャー地方まで辿り着いてしまう。

このことに男としてのナニカを失ったオダと、その数年後、妹たちにこの話を聞かせると、貴族の淑女として無警戒であるとされ、正座で説教を受けるリディアであった。

10話

「父上、姉の搜索に特務分室も参加することをお許しください」
「ならん」

リディアが特務分室室長の座を退いてから、彼女の異母妹、イヴⅡイグナイトは後を埋めるため百騎長に昇進、そして姉の特務分室室長の座とナンバーである”魔術師”を引き継いだ。

いくら代々イグナイト家が特務分室室長の座を受け継いでいるとはいえ14歳の、しかも先日の自分のミスが原因で姉を失ったイヴは、その後を継ぐことに葛藤したが、父であるアゼルに命令された以上、断るといふ選択肢はなかった。

「ですが父上！」

「私に命令しようというのか？予備の分際で？思い上がるのもいい気になるなよ、汚らわしい平民との混じり物が！」

アゼルに厳しい口調で言われ二の句が続かず、体が硬直したイヴを無視し、アゼルはさらに続けた。

「キサマが今為すべきこと、それはあの無能がいなくなった特務分室を掌握することだ！この空白期間にあの不適合者の女王派の”隠者”が特務分室を掌握できるとは思わんが、万が一牛耳られたら後々面倒だからな。わかったらさっさと行け！」

「・・・はい、父上。失礼します」

イヴが部屋から退出した後、アゼルは近日中にこれから起こるであろうことを思い馳せた。

「さて、餌はまいた・・・これで獲物は食いつくはずだ。あの無能が今どこにいるか吐かせてから消してやる！」

絶対におかしい、何かがあるはず。

アゼルの部屋から出たイヴは悩み続けた。

あの事件の後、私と姉を治療してくれたあの人がそんなことをするわけがない。

でも自分だけで何が出来るの？

イヴは悩み、考え、なにかを思いつこうとしたその瞬間、

「痛っっっ!!!」

イヴの脳内に鋭い痛みが走った。

何を考えようとしたのか思い出せず、忘れてしまったイヴは、イグナイト家に認められるため、父親から認められるため、まずは特務分室の掌握という課された任務をこなすこととした。

フェジテ郊外の静寂な地域の一角に立派な屋敷がある。

いつもならそこで暮らしている二人の笑い声が聞こえているのだが、今日はいつもとは異なっていた

「あの人がこんなことをするわけがないだろ!!!」

同じく号外を握りしめ、少年から青年へと変わり始める年頃の、アルザーノ魔術学院の制服を着た男子学生が怒鳴った。

「落ち着け、グレン。お前が怒鳴っても何も変わらんぞ」

「・・・すまん、セリカ」

この屋敷の主にしてグレンを育てた女性、セリカⅡアルフォネアがグレンを諫める。

「でもセリカ、俺にはあの先輩がこんなことをするとは思えないんだよ！」

「それは私も同感だ。グレン」
自分の愛するグレンは魔術適性が低い、いわゆる3流魔術師である。

史上最年少で入学したというやつかみもあつてか、同級生や講師からよくいじめられていた。

本当ならセリカ自身が介入してやりたかったが、グレンのためになるとは思えず、悔しながら黙って見ていた。

そのグレンを庇ったのは平民にしてアルザーノ魔術学院首席であつたオダである。

短い期間であつたがグレンを庇い、良き理解者で、頼りになる先輩であつた。

その伝手でセリカとも交流があり、彼の人となりを知っているこの二人にとって号外の情報はにわかには信じられなかった。

「イグナイト家・・・か。少し探る必要があるかな」

セリカは号外を見て、今回の事件にイグナイト家が関わっているのではないかと疑念を持つ。

しようがない、グレンのために少し動くこととしよう。

「おい、グレン。明日から私は少しの間いなくなるから、家のことは頼んだぞ」

「ふ、断る!!!」

「・・・」

反抗期だろうか、それとも思春期特有の物なのだろうか、最近のグレンの性格が変わっていく様を見て、成長を感じるセリカであつた。

「ねえ先輩。最近賑わしているあの誘拐犯、先輩の前の同僚らしいですけど、どんな奴だったんですか？」

レザリア方面国境、ここに配属されてからの話題は常にそれだった。

この前まで一緒に仕事をしていた頼もしい後輩、オダがあこのイグナイト家の嫡子を誘拐、追手を全滅させた極悪非道の犯罪者という噂が流れ始めてから毎回俺にこの手の質問が投げかけられる。

今日は俺と新しく入ってきた新人の二人で国境付近を哨戒中なのだが、今回もまた同じパターンのようだ。

「君。他の人にも言っているけど、彼はそんなことをする奴じゃないことは俺が一番知っている。そんな噂話ゴシップに振り回されず、真剣に仕事をしたまえ。俺たちの仕事は帝国の安全を守るためにここにいることを忘れるな」

「へいへい」

全くこんなセリフを吐くなんて、仕事をさぼることが大好きな俺を一番知っている彼がさっきの光景を見ると驚くだろうな。

そう思っていると、

「え」

どこから撃たれたのか、胸部から血が流れ始めた。

俺は同行している新人を謎の襲撃者から庇うため彼を見ると、

彼は俺に指を向けていた

「なん・・・のつもりだい、君？」

「申し訳ありませんが、あなたには死んでもらいます。あの時現場にいたあなたの不運を呪ってください」

彼は言い終わるとさらに2発、3発と俺に魔術を撃ってきた。

あの時？・・・はあ、だから貴族は嫌いだ。

彼はこれから大丈夫なのだろうか？

彼のことを心配し、意識はそこで途切れた。

11話

「あれからどうだ？ 獲物はかかったか？」

情報を流してからしばらくたったある日、アゼルは使用人に進捗状況を聞いた。

「はい、主様。あれ以降、例の男の消息が見つかりました。先日帝都に入ったそうです」

「ふむ・・・消息がわかっているのなら、もう追手を差し向けたのだろうか？ 仕留めたのか？」

「それが・・・」

アゼルの質問に使用人は押し黙る。

「それがなんだ？ 言ってみろ」

「それが全滅した、とのことですよ」

使用人の思わぬ返答、そして結果にアゼルはしばらくの間茫然としたが、すぐに気を取り直し、その使用人を殴った。

「全滅した、だと！ ふざけるな！ イグナイト家に所属しておきながらなんとという体たらくだ！」

「も、申し訳ございません、主様。ただ、戦闘映像は持ち帰れたそうです」

「当たり前だ！ 何の成果もなくのこのこと帰ってきたら私自ら貴様らを殺しているところだ！ もういい、下がれ！」

「・・・失礼しました」

上手くいかない現状にアゼルの気が晴れない。

「ええい、平民の分際でここまでイグナイト家に齒向かうとは。捕まえたなら生きていることを後悔させてやる」

アゼルが誰もいない室内で苛立っていると、先ほどとは違う使用人が部屋に入ってきた。

「あ、主様。お客様です」

「客? そんな予定は今日入れておらん。さっさと追い返せ!」
アゼルは使用人に伝えようとしたその瞬間、

「おいおい、せっかく元部下が元上司の機嫌を見に訪れてやってるんだ。そんな言い方はよしてほしいな」

「き、キサマは・・・」世界! いまさら何をしに来た!」

使用人を押しつけ、登場したのはアゼルが特務分室室長時代、アゼルの命令を一切聞かない問題児、元帝国宮廷魔道士団特務分室執行官ナンバー21、”世界”のセリカⅡアルフォネアであった。

「なくにただの世間話さ、私にとってはな。貴様はどうかは知らんが。何なら使用人がいる今ここで話そうか?」

「・・・この部屋には誰も入れるな、そして近づかせるなと伝えろ」

「は、はい」

使用人が去ってからセリカが話し始めた。

「さて、お前も忙しいと思うから単刀直入にいうぞ? オダを嵌めたな?」

そう言うのとセリカから強烈な殺気と威圧感がアゼルを襲う。

「何のことかな? この件に関しては私も被害者なのだよ、”世界”。何と言ったって私の嫡子であるリディアをあつ男が攫ったのだからな」

セリカの強烈な殺気と威圧感を受けたにも関わらず、淡々と質問に答えるアゼル。

その様子に少々あつけにとられたセリカだったが、すぐに我に返って追求した。

「アイツがそんなことをするわけがない!」

「だが実際に起きたのだよ。これを見たまえ」

セリカの前に映像が映し出された。

オダが魔術師を殺している映像である。

「嘘だろ……」

「本当だ。本来ならこれを公表したいところだが、なんせ奴は犯罪者といえ、あのアルザーノ魔術学院を首席で卒業しているからな。学院の看板を汚したくないからといって教導省の奴らからこの決定的な証拠を公表しないでくれと頼まれているからこれを世に出していいだけにすぎないのだよ。すでに政府は秘密裏に奴の討伐を決定した。近日中には警察から軍、宮廷魔導士団へと権限が移る」

アゼルの衝撃的な事実を告げられ固まるセリカ。

「世界よ。貴様があの男と親交が深いことはすでに調査済みだ。変な気を起こさないことだな。さて貴様が言った通り私は忙しい。お帰り頂こうか」

アゼルはもう話すことはないようで、茫然と立ちすくんでいるセリカを無視し、部屋を立ち去った。

翌日

「さて、一番の懸念材料であった『世界』を封じ込めることが出来た。これで奴は表立って動くことはできないだろう。裏で動くとしても常に監視しているから問題ないとはいえ……それよりもだ」

「アゼルは報告書を読み、嘆いていた。

「全く使い物にならないな駒どもめ。昨晚も奴を取り逃がすどころか返り討ちに会うとは・・・これは一度解体しなければならぬな」
イグナイト家お抱えの裏工作を携わる部隊がオダに返り討ちに会ったという報告書である。

「問題は・・・だ。私の信頼における部隊が減りつつあることだ。これ以上減っては今後の活動に支障がでかねん。他の奴らに先を越される前になんとか私の配下の部隊で奴を片付けなければ。しかし今の私の手元にある部隊に任せるとなると・・・特務分室はどうか？」
そう思いついたがすぐに却下した。

「いや、今の特務分室はまだあの混じり物が掌握できていない。そこにつけ込んでイグナイト家に疑念を持っている女王派が調査をしかねん。クソ、あの無能めが！一つの組織を掌握するのに一体いつまでかかるのだ！」

アゼルはそう怒鳴ったが無袖は振れない。

信頼はあまり置けないが実力は折り紙付きの特務分室を使うか、それとも多少は危険だが自ら率いることで確実性をとるか。

その両者を天秤にかけ、悩みに悩んだ結果が・・・。

”イグナイト卿、陛下に一か月間の静養を求め”

自分を囿に、確実性を取るほうを選んだ。

12話

”イグナイト卿、休養”

この報道が発表されるといなや、すぐにこの情報は帝都を駆け巡った。

娘であるリディア・イグナイトが未だ見つからず、その精神的疲労により登城して政務を執り行うことが難しい、という理由で陛下に静養を申請したところ認められたとのことだ。

この一か月間は静養しつつ、帝都郊外の別荘にて政務を執り行う、という情報も流れた。

この一報を聞き帝都の多くの人々がイグナイト卿の回復を願うと共に、その原因のオダという魔術師に対しては極悪非道の犯罪者という評価^{レットル}が張られた

その当のオダはというと……。

「なるほど……帝都郊外にいるのか」

オルランドの外延部、貧民街に潜っていた。

貧民街の住民にはオダの変身魔術を看破できるような才能の持ち主はおらず、オダは特に何の不自由もなく潜伏活動を送っていた。

「おそろく……いや十中八九俺を誘っているな。さすがにここ最近返り討ちにすぎたことに焦ってか、とうとう本人自らのお出ましか」
オダは罨や敵戦力を考えず、ただようやく標的^{アゼル}自らが動いたことしか興味を示していなかった。

「さて……武器を補充して奴を迎えにいくか……」

オダは貧民街へと溶け込み、そのまま姿は消えていった。

「さて、奴はいつ動く？」

帝都郊外の別荘に移動したアゼルは書斎に籠ってオダの今後の行動を考えていた

オダは絶対に来る、問題はいつに来るかだけだがそれさえも小さな障害にしかない。

魔術戦においては拠点防衛側が圧倒的に有利。

事実、この別荘の周りにはすでに様々な結果、マジック・トラップ魔術罠が無象無像引き締め、さらにイグナイト卿子飼いの猛者たちが手をこまねいて待っている。

この別荘は精鋭の宮廷魔導士団が大隊規模で攻めてきても落ちない自信がある、いや落ちないと確信している。

「まあ奴程度の男がこの邸宅に入れるとは思えんが念のためだ」
そう呟くと、アゼルの手元には赤い鍵が現れた。

「すまん、グレン。どうやら今回は私の手に負えないらしい」
「そんな・・・クソ！このまま先輩を見殺しにするってのかよ!!!」
セリカが自宅へと戻り、グレンにアゼルとの会談の内容を伝えると、話しを聞き終えたグレンは今にも家から飛び出そうという勢いで部屋を出る。

「おいグレン、どこに行く」

「どこにつて、先輩の元に決まってるだろ！このままじゃ先輩は殺される。身近な人さえ救えずに何が正義の魔法使いになる、だ」

そう言うグレンをセリカが止める。

「まてグレン。受け入れたくないかもしれないが、オダは数人の魔術師を殺した、殺人者だ。なぜそのような経緯に至ったかは分からないがこれは紛れもない事実なんだよ」

「うるせーよ!!あの先輩が、あの先輩がそんなことをするわけない！何かの間違いだ！」

そう言うグレンの目には薄っすらと涙が浮かんでいる。

グレンの気持ちをよく理解しているセリカが居た堪れなくなったその時。

鈴の音が部屋に届いた。

どうやらこんな夜だが呼び鈴がなったらしい。

場違いかもしれないがこの空気を換えてくれたことに息を吐くセリカだった。

「誰だこんな時間に？グレンちよつと見てきてくれ」
「・・・わかったよ」

グレンは扉を開ける前に、こんな夜遅くに尋ねた馬鹿に対し怒鳴ろうと決めた。

「はいはい、こんな夜遅くに誰ですか？訪問販売なら・・・」
「お願いします、助けてください!!!」

グレンが怒鳴る前に目の前にいた人が助けを求めてきた。

「助けてって、あんた誰ですか？」

「私は・・・リディア、リディアⅡイグナイト。オダ君の紹介で来ました。お願いします。このままじゃオダ君が死んじゃう！」

訪れた人はまさに今世間を賑わしているリディアⅡイグナイトその本人。

そのことにグレンは驚いたが、それよりもオダが死ぬという言葉が刺さる。

「どういうことですか！先輩が死ぬって」

グレンはリディアに問い詰めようとした瞬間。

「玄関じゃなくて部屋で聞こうな、グレン？」

部屋にいたセリカが騒ぎを聞きつけ現れた。

「やはりイグナイト卿の策謀が・・・」

リディアからの話を一通り聞き、セリカは一人呟いた。

「セリカ、本人がこう言っているんだ。やっぱり先輩がそんなことをするわけがないだよ！」

一方のグレンはというと、リディアから真実を伝えられ、先ほどとは打って変わって、表情が晴れやかだった。

自分が敬愛する先輩が無実だと知り、居ても立っても居られないよ
うだ。

「こうなったらさっさと黒幕を潰そうぜ」

「・・・確かに一理あるな、あいつの元にリディア嬢をこちらが保護したことで、事の真実を盾にしたら上手くいくかもしれん。リディア嬢もいいか?」

「ええ、大丈夫です」

「よし、後は私に任せておけ!帝都まですぐに・・・」

急にセリカが黙り込む。

「おい、どうしたんだ、セリカ?さっさと行く準備を・・・」

「どうやらお客さんのようだ。歓迎しない方だな」

セリカがこのように言ったため、グレンも遠目の魔術を発動し、周囲を確認する。

すると数十人の影がこの家を囲むように取り囲んでいた。

「チツ、ただでさえ時間がもつたいないのに、雑魚の分際で私に楯突くとは・・・。おいグレン、お前はリディア嬢の近くにいろ。絶対に危害を加えさせるなよ」

「わ、わかった」

こうしてフェジテの夜に戦いの火蓋が落とされた。

13話

フェジテで戦いの音が鳴り始めた同時刻、オルランド郊外。

イグナイト卿の別荘から約3千メートル離れた丘の上にオダは立っていた。

「なるほど・・・邸宅の周りには約数十人の完全武装の魔術師と道がない茂みには魔術式の罠か。見たところ非魔術の罠は見えないな。さすがは魔術を心酔している貴族つてどこか？」

オダの右目には小型の照準器スコープが装着していた。

なんとその照準器スコープの性能は5千メートル先まで覗くことが出来、夜間でもまるで日中のような精度で見れ、さらには100メートル以内で使うと建物の中まで透視することが出来るというとんでもない化け物照準器スコープである。

これだけでも驚くべき性能だがそれだけではなく、魔力探知、熱探知といったこともできるため、どこに、誰が、何があるか一目でわかり、かつ、位置スポットの特定もできるという軍の狙撃手が聞いたら唾を垂れて欲しがる性能である。

しかしこの照準器は世には出ていない。

なぜなら・・・。

「まったくあの天災教授。普段発明している時は使い物にならないのしか作らないくせに、ふとんでもないものを発明するな」

そう何を隠そうアルザーノ魔術学院が誇る？天才教授オーウェルによる個人的な発明であるからだ。

作られた経緯はなんでも身分差の恋に落ちた青年がその女性の家に行くまでの・・・なんだったけ？くだらなすぎて思い出せないオダであった。

少し昔の思い出に耽っていたオダだが、気を引き締める。

索敵できてこそそれはスタートラインにしか立っていないのだ。

今からが本番である。

先程いた丘から下り、イグナイト卿の別荘付近。

オダは自身に隠密潜行系の呪文を付呪しているが、それで気づかれないほどイグナイト卿の子飼いは甘くない。

戦闘が始まると気づかれるのは大だが、一人でも削るため、行動を開始する。

まず一人、魔銃に音声遮断魔術を付呪し、無音の弾丸が敵魔術師を撃ち抜き、無力化する。

完全に音は消したはずなのだが、どうやら敵魔術師同士お互いに意識を同調していたらしく、すぐに居場所が突き詰められた。

事実、すぐさまその場所に攻性魔術が着弾する映像が視え、オダがその場を離れた数秒後、魔術が着弾してあたりは火の海と化した。

「せめて味方の生存ぐらいいは確認すべきだろ」

オダは一人愚痴ったが、敵は待つてくれない。

おそらく敵全戦力なのだろうか、素早くオダの周りを取り囲む。

さすがはイグナイト卿子飼いの手練れ、動きに全くの無駄がない。

敵魔術師はそれぞれ魔術を発動させ、炎が、凍気が、雷が、嵐がオダの元へと駆け巡る。

「ふう、少し時間がかかったな」

なんとか敵魔術師をすべて無力化し、ようやく邸宅が目の見える範

囲にまで近づけることが出来たが、その様子を見て不思議に思う。
なぜなら照準器スコープで覗くと、建物内には一人しかおらず、さらには罨トラップすらないからだ。

(一体どういうことだ?)

オダは警戒して邸宅に近づくとなんと正面玄関エントランスがゆつくりと開く。
まるでオダを歓迎しているかのよう。

オダは照準器スコープだけでなく、自身の索敵魔術をも使用したが屋内には他の人間の存在がない。

オダはゆつくりと警戒して建物の中へ入っていった。

「安心したまえ。罨などないよ」

別荘の一角、アゼルがいるであろう部屋から声がかかる。

「初めましてというべきかな、それともようこそというべきかどちらがいいかね? オダ君」

部屋の奥にはアゼルⅡルⅡイグナイト卿本人がいた。

オダはアゼルに向け銃口を突きつける。

「その前に何か聞きたいことがあるんじゃないかね? まあ座り給え」

その声を無視し、オダはアゼルに向かって発砲した。

「ふむ・・・上官の命令を無視して発砲か」

弾丸は顔の横を掠め通り過ぎたが、アゼルは平然としてオダを見ていた。

「最後のチャンスだ。二度は言わん。大人しく座って話を聞け」

先程までの温厚とした表情とは打って変わり、厳しい目、いや人を人として見ない目でオダに強い口調で話しかけてくる。

「これがあなたの本性ですか? イグナイト卿?」

「ふん、平民、いやそれよりもしたの下賤の者が殿上人である私と対面して話せるのだ。まあそんな些細なことはどうでもいい、それよりもだ」

オダの言葉を躲し、アゼルは本題に移る。

「貴様、イグナイト家に仕えろ」

急な提案に押し黙るオダ。

アゼルはオダのことなどお構いなしに話し続ける。

「貴様の実力は書類を通して把握している。リディアという荷物を抱えて私の追ってから逃げ果せ、拳句の果てには私の部下を倒す實力がある。そして最後にはありえないと思っていたが、配備していた私の子飼いを倒してこの邸宅を落とすまでに至るその實力。本当なら貴様はリディアと共に消す予定だったが、これほどの人材を消すには少々惜しい。リディアを差し出し、貴様のすべてを我がイグナイト家に捧げるのであれば、これまでの出来事は不問にしてやる。なに我がイグナイト家の力を使えば無知な平民どもは貴様の評価などすぐに忘れよう。さあ私の手を取れ。下賤の者にとってはこの上ない榮譽であろう」

この男は何を勝手に話し始めたのだろうか、そうオダは思った。

オダにとって一番の関心事とはそれではない。

「そんなことより一つ聞きたいのですが」

「下賤の者の分際で私に質問だと？貴様、調子にのって・・・」

「孤児院を襲ったのはあなたですか？」

オダはアゼルの話を遮って質問した。

本来なら私の話を遮るなど不遜だとして怒るはずのアゼルだが、珍しく質問に答えた。

「そうだ」

アゼルが何の躊躇いもなく肯定する。

「貴様を釣るには餌が必要だからな。まあ孤児なんていうのはこの国にとって不要な者だ。貴様らを見つげるための最後の奉公をしたにすぎん」

アゼルはさらに続けて話したがオダの耳には何も届いていない。

オダがすべきことはただ一つ。

「さて貴様の質問には答えてやった。今度はこちらの番だ。仕えるのか、仕えないのか、どっち・・・」

アゼルが言い終える前にオダは弾丸を放った。

14話

「交渉決裂、ということかね？」

威力を最高出力で放った弾丸はアゼルを貫通することはなかった。

これにはオダも少し驚いた顔をし、それをみたアゼルは呆れた目をしていた。

「すこし買いかぶりすぎたようだな。やはり所詮は平民、下賤の者か。貴様、何を驚いている？まさか何の対策も取っていないと？」

そう言い終えると部屋全体が猛火に包まれる。

「貴様に冥途の土産を持たせてやる。これが紅焰公とよばれる由来となったイグナイト家伝来の魔術、シークレット眷属秘呪”第七園”、だ。地獄の底で自分の選択に後悔するがよい!!!」

シークレット眷属秘呪”第七園”。

イグナイト家が近距離魔術戦の大家と云わしめる代名詞となった魔術である。

予め指定した領域内における炎熱系魔術の起動をすべて省略できるようにするという規格外の代物。

だがその領域を構築するのにはものすごい手間と時間がかかるのだが、予め室内一体にアゼルはすでに領域を構築していたためその問題は解決した。

オダは逃げる間もなく炎の海に包み込まれた。

少し時間が経ち、アゼルは”第七園”を停止させる。

その威力は凄まじく、室内は瓦礫の山と化した。

オダがいた場所には跡形もないことを確認すると、”第七園”の領域を解除し始める。

「ふんりディアの居場所はつかめなかったが、禁呪を見た二人はこれで消せた。あとはリディアを・・・」

一発の銃声が部屋に響く

言い終える前に乾いた一発の銃声が聞こえ、アゼルは自分の胸に弾丸が撃ち込まれたことを遅まきながら気づく。

「き、貴様なぜ生きています」

「貴方の敗因は平民、下賤の者と人を見下しているところだ。外にいた魔術師の方が反応はよかったぞ」

消し炭として消えていたはずのオダが現れたのを見てアゼルは驚愕した。

「戦闘映像を何度も見たと聞いていたからどんなものかと思ったが全く気づいてなかったようだな」

「なに？」

オダの言葉にアゼルが反応する。

確かに多対一ではオダのまるで先を見ているかのような動きには驚かされたが特に脅威には感じなかった。

そして彼の持つ固有魔術オリジナルもそれを利用した魔銃ジム／ベディの存在も把握していたが、イグナイト家に伝えられている”第七園”のような強力無比な魔術ではないこと、そして小手先の道具に頼っていることとアゼルは判断していた。

では何だ。コイツは何を隠している。

アゼルの疑問にオダが答える。

「ではイグナイト卿。冥途の土産を持たせてあげます。俺には異能を持っていきます。その能力を数十秒先の未来を視ることができる。これで辻褄が合いませんか？」

オダの告白にアゼルは黙り、そしてすぐに激高した。

「貴様は平民の分際でも飽き足らず汚らわしい異能者だと!!!」

「異能者差別主義でしたか、貴方は。これからの時代には合わない人間ですね。」

オダの異能、未来視、確かにこれですべて辻褃がある。

狙撃もまったく効果がなく、待ち伏せも看破され、近距離魔術戦に至っては魔術の軌道と相手の反応がわかっているかのような回避反応と応戦能力。

すべて異能によるものと聞かれたアゼルは腑に落ちる。

「イグナイト卿が”第七園”、でしたか？それを発動したのを先読みしました。銃を発砲した後、すぐに魔術で幻影の俺を生み出し、本体はこの部屋に入った時に開けっ放しにしていた扉から出ていたんですよ。申し訳ありません、なんせ下賤の者ですので扉を閉める習慣がないので。その後はイグナイト卿が現在体験されていると思いますのでくわしくは述べませんが。もしあなたが油断せずはこの家全体を等しく高出力で燃やし尽くしたらどうなったかはわかりませんが、あなたは目の前の幻影に集中して攻撃した。そのおかげで俺は何とか生き残ることができたんですよ。どうですか？冥途の土産になりましたかね？ではお土産も渡したことですし。さようなら、イグナイト卿」

アゼルを始末しようとしたその瞬間。

あたり一面が業火に包まれる映像が視えた

一体なぜ？

オダはあと数秒後に訪れる未来を避けるために急いでこの室内から脱出した。

その数秒後、あたりは一面火に包まれた。

僅かに残っていた”第七園”の領域を利用した攻撃である。

不完全な領域ながら”第七園”を発動させるとはさすが紅焰公であろう。

(クソ、始末出来なかった。いったん引くか？)

そう考えていると火の中からアゼルが現れる。

「この私を散々コケにするとは・・・生きて帰れるとは思うなよ？」
そう言う手を持っていた”赤い鍵”を自分の胸に差し込むと、空間が圧迫されるような、禍々しい魔力がアゼルを呑み込み、暫くするとその場に炎の魔人が現れた。

”炎魔帝将” ヴィーアードオル。

お伽話として有名な「メルガリウスの魔法使い」に出てくる魔王の配下”魔星将”の石柱。

そんな物語の存在がオダの目の前に降臨した。

「この虫けらめ、貴様だけは私の全身全霊をかけて殺そう」

先程までとはまったく違う圧倒的な威圧感と異次元の灼熱が辺り一帯の空間を充たす。

来る・・・そう思っていると。

「まあどうせ貴様は死ぬのだ。その前に貴様に感謝しよう」

「感謝だと？一体どういう風の吹き回しだ？」

「貴様に使わされたのは癪だがこの力、なんとという素晴らしさだ。機が熟すまで”炎魔帝将” ヴィーアードオルに転生するのを待っていたのだが、そんなものももうどうでも良い。この身になってからというもの外宇宙の力と知識が我が魂に刻まれるこの感覚・・・。貴様のおかげだ、こんなにも早くこの力を使えるようになるとは。ふふふ、ははははは・・・っ」

アゼルの話していることが全く理解できないオダだったが、動かないことを良しとし、アゼルめがけて弾丸を放つ。

だがアゼルは相変わらず動かず、そのまま弾丸がアゼルに着弾しようとしたその瞬間。

弾丸は蒸発した

「ふん、今の私は、炎魔帝将、ヴィーアードオル。無知の貴様に分かりやすくいうと今の私は炎そのもの。貴様ら矮小な人間が使う武器も魔術も、どんな攻撃も通用せん。さて、死ぬ覚悟はできたか、人間？次はこちらの番だ」

アゼルがそう言い放つと、灼熱の炎がオダの下へと迫ってきた。

あれからどのくらいの間が経ったのだろうか

アゼルからの攻撃は異能の力でなんとか躲すことが出来るが、唯それだけである。

こちらからの攻撃の手段が一向に見つからない。

魔銃で威力を高めた攻性魔術も実弾も全くといっていいほどアゼルのダメージを与えていない。

魔力、体力共にオダは枯渇しかけているのにアゼルは汗一つもかいていない。彼の言うことを信じると人間ではなくなっているらしいのでそんな概念があるのかもわからないが。

「人間にしてはよくやるではないか。だがそろそろ私も飽きてきた。次で終わらそうとしよう」

そう言うのと今までで一番の火力を解き放つアゼル。

まるで今まで出し惜しみしていたのか、いや、オダをいたぶるために死なない程度で戦っていたようだ。

もはや打つ手なし・・・いやあるかもしれない。

オダは後輩グレンからもらった彼の魔術特性パッションナリテイを込めた弾丸を手に持ち思い馳せる。

(まさかこの弾丸を使う日が来るとは)

しかし、この弾丸を作成するにあたって共に実験をしてきて分かったことは、効力が発揮する距離はゼロ距離でないといけないこと。

つまり今の状況だと死ぬ確率が大なのだが。

「ふん、覚悟などとうに決まっている」

オダはアゼルを見、ある魔術を起動させる。

「術式起動」

「まだあらがうか、人間！」

オダは魔術を起動させアゼルへと近づく。

アゼルもこれで終わらすつもりか魔力を高める。

アゼルまで約10メートル

未来を視ても、炎による広範囲攻撃を仕掛けられ、避けることは不可能。

なら出来ること、それは前に進む、ただそれだけ。

オダは身体操作で一気にアゼルまでの距離を稼いでいるその瞬間。

炎がオダへと襲ってきた。

今までの炎がまるで温かったかのように感じられるほどの熱量。

事前に何重も対抗呪文を施したが、この炎のまえには歯が立たず、一瞬で解けてしまう。

それでも少しは距離を詰める時間が稼げた。

オダは常人ではもう気を失っているほどの火傷を負っているにも関わらず、前へ進む。

孤児院でもう会えない子供たち、魔術学院で世話を焼いた後輩、自分が新人のはずなのに面倒をみた先輩。

たったの20年の思い出が一気に流れ始めてきた。

これが走馬灯か、そう思いながらオダは前へ進むと最後にはこの1ヶ月共に過ごした女性リディアの顔が思い浮かんだ。

後悔を上げるとしたらあの人を振り切って去ったことか。

そう思っていると、誰かから後ろを押されたような気がした。

するとどういうことか、おそらく辿り着けないであろうアゼルが目の前にいた。

まさか死なずに辿り着くとは考えてもいなかったらしく、アゼルも戸惑っている。

オダは最後の力を振り絞り、魔銃“ジムノペディ”をアゼルの胸元に押し付ける。

「まさか、まだ生きて・・・」

「くたばれっ・・・”愚者ベネトレイターの一刺し”ー」

胸元に押し付けられた銃口から一発の弾丸が放たれた。

15話

魔銃”ジムノペディ”から放たれた弾丸を確認するとオダはその場で倒れた。

いやよくぞここまで命が持っていたことだ。
奇跡に値するものであろう。

それより撃たれたアゼルはというと。

「馬鹿な馬鹿な馬鹿な」

外見は一切の傷を負っていないかった。

まるで無傷、オダの命を賭けた攻撃は失敗したかのように見えたが、攻撃を受けた当の本人は違うらしい。

「なぜだ、傷は負っていないはず。なのになぜ私が滅びる！」

この場にその問いを応える者はなく、アゼルの体は徐々に崩壊していく。

「くそー！これからののに。真理を得た私のような存在が、頂点に立つべき私がこのような所で・・・嫌だ嫌だ嫌だ」

地面を這い蹲い、アゼルの命が燃え尽きようとするその時。

「他人の命は見捨てるくせに自分の命は捨てないんですね、イグナイト卿？」

なんとオダがアゼルを見下ろしていた。

「き、貴様！なぜ生きている!!!」

「いいえ、俺もすぐに死にますよ。条件起動式の魔術が発動しただけです。まあ一種の一次的な蘇生術ですよ。俺程度の技量では数分も持たないのですのでさっさと済ませますね」

「ま、待て」

「地獄で懺悔しろ」

オダがアゼルに向け、残っていた弾丸をすべて撃ちつくす。

帝国に多大な影響力を保持していたアゼルの最後にしてはあっけ

ないものだった。

「・・・仇を殺したのにたいして何も感じないな」

アゼルを討った後、オダは倒れ、発動していた蘇生魔術の効力も失われ始めて生命活動が終焉しようとしていた。

この場に凄腕の法医師がいたとしても、もはやオダの命を救うことは不可能であろう。

思い起こすことはない、いや、最後にあの人と会っておきたかったな。

そう思いオダはゆっくり目を閉じる。

意識が遠のいていく中、空から聞きなれた人の声が聞こえた。

後日、イグナイト卿、死去という衝撃的な訃報が帝都に流れた。

第一発見者はなんと行方不明であったイグナイト卿の娘、リディアⅡイグナイト、そして彼女を保護した魔女セリカⅡアルフォネアとその弟子グレンⅡレーダス。

イグナイト卿の死因は公表されなかった。

リディアⅡイグナイトに関しては宮廷魔導士のオダに誘拐されたと報じたが、それは誤報で、実は反政府組織の手によるものからオダが守ったこと、オダに殺されたと思われた魔導士もその反政府組織によるものでオダに罪を擦り付けたことが判明。

このことからオダは護衛対象者を一人で守り抜いた英雄として評価を一変させる。

そのオダに関してはリディアⅡイグナイトを逃がすことに成功した引き換えに敵魔術師と相討ち、その場で死亡したと公表された。

帝国政府はオダをレザリア国境方面で殉職した一人の国境警備隊職員の横に殉職者として埋葬される。

孤児院の火事については周りから忘れられたそうでも誰も触れなかった。

5年後。

帝都郊外、ついこの前までイグナイト家の立派な別荘があった地には地面が少し焼き焦げた跡以外は何も残っていない。

その場を現女王府国軍大臣兼統合参謀本部長リディアール・イグナイトがゆつくりと、何かを噛みしめるように眺めていた。

「閣下、またここにいらしたのですか」

リディアアを呼んだのは腹違いの妹、イヴ・イグナイト。

帝国宮廷魔導士団特務分室室長としてリディアアの跡を継ぎ、この若さで特務分室を取り仕切っている俊才である。

そしてリディアア自ら見出した、今年特務分室に入隊した執行官ナンバー18“月”のイリアール・ジュと共に、姉でありイグナイト家当主のリディアアを迎えに来た。

「なあにイヴ、イリアア？」

「閣下、陛下が呼びです。フェジテで^{エンジェル・ダスト}“天使の塵”が目撃されたことに関しての会議が始まります。早くいらしてください」

「そうですね、我があるじ。いつも時間通りにこなくて周りの老害どもが怒っていますよ」

「あくもうそんな時間か。それとイヴ？公式の場じゃ無いときは閣下って呼ばないでっていつもいつているじゃない。あとイリアもそんな言い方しないの」

「すいません、姉さん」

「わかりました〜我があるじ」

リディアは二人に軽く注意すると、その場を心地よい静けさに包まれた。

少し経ってから、イヴが話しかける。

「姉さん、いつも僅かな時間が空いたらよくここに来ますね。やはり父上のことが・・・いえ、なんでもありません」

「私も聞きましたよ、我があるじ。あんな国家のゴミなんてさつさと忘れればいいのに。やはりお優しい方ですね」

あの日の真実は関係者以外箝口令が敷かれた。

もちろん妹のイヴや側近のイリアにも真実を伝えていない。

でもあの事を忘れない、いや忘れてはいけない、その気持ちでリディアは時間を見つけたらここに来ているのかもしれない。

「ねえイヴ覚えている？イグナイト家の家訓を教えたあの日のことを」

「はい、覚えてますけど・・・それがどうかしたんですか？」

「ん〜じゃあイヴ、もう一度聞いて。私はこれから世の人々のため、暗き闇を払い、行先を明るく照らし導く者になる。イグナイトの正義と理想を実現させるわ。だからイヴも手伝ってね？もちろんイリアよも」

「もちろんです、姉さん！」

「かしこまりました、我があるじ〜」

リディアはもう一度自分に対して、二人の妹に対して、そして亡き彼に対して誓う。

二度とイグナイト家は道を外さない、そうリディアは心に秘め、三姉妹は帝都へと戻った。

「さてと帝都に戻りながら久しぶりのスキンシップをしないと。ねえ、イヴ。あの子とはどんな感じなの？」

「グレンとは何の関係もありません！」

「誰もグレン君のこととはいつていないのに・・・やっぱり気になって
いるのね！」

「そりゃ室長は先輩が辞めてからもいつも気にかけていますからね。
でもこのペースだとセラさんにとられますよ？ただでさえ遅れてい
るのにセラさんを先輩が務めている学院に派遣するなんて。危機感
ないんですか？」

「イリアは余計なこと言わない!!!」

あとがき（とネタバレ）

「元魔術師の付き添い人になりました」、完結です。

多くの方から評価を頂いたりして、個人的に思い入れのある作品が、色々試行錯誤しながら何とか完結までに至りました。

さて、少しこの作品について触れていこうと思います。

書こうとしたきっかけはやっぱり追想日誌6巻と原作17巻ですよ。ね。

まさかイヴに姉がいるとは、あんな過去があるとは思いませんでした。

作者の推しはアルベルトとイヴなのでこの二人のどちらかをメインとした作品を書きたいなど前から思っていました（アルベルトについては「ロクでなし魔術講師、アルベルトⅡフレイザー」という作品を書いています。よかつたら見てね）が、イヴはすでに書かれている作品が結構あるんですよ。

じゃあどうするか？姉のリディアを書けばいいじゃない！

そういうノリで始めました。

でも実際に書き始めると、リディアについて書いてある点が原作に少ないんですよ。

原作17巻ではイヴが中心ですし、追想日誌も1話分しかない。

なのでこの作品はロクアカの名を借りたオリジナルになりました。

そして二次作品なのに原作の主人公がほとんど出ないってどういうことですか（笑）

後半になると、ヒロイン枠のリディアの影は薄くなるし、敵役のアゼルが前面に出てきちゃうし、オダ君はリディアをほつたらかしにするしでタイトルからかけ離れた内容になりました。

これ、タイトル詐欺で訴えられませんかね（笑）

ここでオリ主のネタバレです。
全話を読んで分かった人は多分趣味が合いますね。

オダ

文豪ストレイドッグス外伝「太宰治と黒の時代」の主人公、織田作之助から名を借りました。

ここまでできてピンときた人、そうです。

本作でオダ君が使用した異能、それは織田作之助が使用する異能力「天衣無縫」を参考にしました。

もちろん能力は「数秒先の未来を読む」、ただしオダ君の能力は「数十秒先の未来を読む」と少しアップグレードしています。

文豪ストレイドッグスを知らないよという方、大丈夫です。

外伝なので原作を知らなくても楽しめますよ。

ジムノペディ

「テガミバチ」の重要人物、ノワールが使用する銃から名を借りました。

ジムノペディって何だろうと調べたらピアノ独奏曲の曲名なんですよ。

これを銃の銘柄にするなんて、テガミバチの作者はお洒落だな

テガミバチはだいぶ前に完結しました。

少し巻数は多いですが読んで損はないと思いますよ。

本作はあと数話ほど番外編が続きますが、これにて本編は完結です。

今後は今手掛けている作品を進めながら、イヴ主人公の作品も書いてみたいなどと考え中です。

少し長くなりましたが、今までお付き合いくださりありがとうございました。

違う作品でまたお会いしましょう。

ではまた

短編1

アルザーノ帝国魔術学院学生食堂。

午前の授業も終わり、多くの学生でごった返しているこの場に男女二人の講師とその教え子三人の女生徒がテーブルを囲んで昼食を取っていた。

「グレン君、毎日カレーばかり食べてて飽きないの？好きな物ばかり食わずに他のも食べたらず？」

「そうですよ、先生。セラ先生の言う通りちゃんとバランスよく食べないとー！」

「白犬、白猫煩い！お前らは俺のオカンか!!」

「白犬じゃありませんくん。私にはセラという名前があるんです。ねえシステイーナちゃん」

「そうですよ、人を動物の名前で呼ぶなんて！いい加減ー」

「あく聞こえない、聞こえない」

最近の食堂のお馴染みのやり取りと化したそれを温かい目で見る金髪の少女と一心不乱に苺タルトを食している無表情の少女。

このやり取りを眺めていた金髪の女子生徒がふと尋ねる。

「でも先生、毎日カレーを食べていますよね。何か思い入れでもあるんですか？」

「まあ理由があるっちゃああるけど・・・」

「何々、グレン君？教えてほしいな」

「あく白犬、寄るな、うっとおしい！」

グレンはセラを追い払い、話始める。

「あれは俺が魔術学院に入学して2年目のことだなー」

落ちこぼれと烙印を押されたグレンの面倒をよく見てくれた、もう会えないとある一人の先輩のことを思い出し、昼食の時間に過去の記憶が蘇る。

「クソッ！」

アルザーノ帝国魔術学院2年次生のとある少年が悪態をつきながら学院内を歩いていた。

理由はその少年が持っている”変化の停滞・停止”という魔術適正パーソナリティによるものだ。

魔術学院にも関わらず魔術に適性のないことと彼の経歴、史上最年少で魔術学院に入学したことも相まってか同年代のいないその少年は、学院で燻っている学生の不満の捌け口としてのスケープゴートに最適であった。

やれそんな魔術師に向かない魔術適正パーソナリティを持つ不孝者だとか、やれ勉強だけしか取り柄のない劣等生だとかという陰口を叩かれるが、本人は自分の魔術適正パーソナリティについてこの前起きたある事件によつて向き合い始めているのだが、こうも毎度いじられると気分が良くないというもの。

そして今日も。

「おい、グレン！魔術戦しようぜ」

「・・・なんでお前らなんかに付き合わなくちゃならないんだ」

魔術戦という名のリンチが始まろうとしていた。

「おいおい、そんなこと言うなよ。俺たちは魔術に不出来なお前のごを思っでしているんだぞ？」

「じゃあ結構だ。お前らなんかに教えてもらうことなんかねえよ」

「・・・イキがんじゃないやねえぞ、この劣等生が」

大陸最高峰の魔術師から直接学んでいるグレンの言っていることは正しいのだがそんなことを彼らが知る由はない。

グレンの挑発に乗り魔術を唱え始める生徒たち。

それに応戦してグレンもタレットカードを取り出し、魔術を起動しようとしたその時。

「おいお前たち、何をしている!」

まさに魔術戦が始まろうとしたその時にある学生の声がある。その場を響き渡る。

「あんたは・・・オダか!」

「オダさんだ、この馬鹿者が。上級生に対してなんて口を聞いている」
現れた学生はオダ。

アルザーノ魔術学院4年次生にして首席学生である。

孤児院出身の平民が魔術学院に入学するのも異例なのだが、さらに2年次生以降は常に学院の首席を走る秀才。

これに嫉んで一部の学生からはよく決闘を申し込まれるのだが全戦全勝。

さらにはとある事件(幕間1参照)が起きてからは講師陣もオダに対して強く出ることが出来ず、学院内では誰も逆らうことのできない男である。

「で、お前たち。寄ってたかってその学生をリンチしようとしていたが?」

「ち、違いますよオダさん。俺たちはこの劣等生に教えてやろうと・・・」

「ほう多対一でか。ずいぶんと用心しているんだな」

オダに睨まれ凄む学生たち。

耐えきれず一人が逃げ出すと二人、三人と蜘蛛の子を散らすように去っていく。

後に残ったのはオダとグレンの二人のみであった。

「で、大丈夫かい。グレン君？」

「・・・なんで学院の首席様が劣等生の俺のことを知っているんですか？」

「そりや君は有名だからね。魔術学院を史上最年少で入学した神童が実は魔術が出来な落ちこぼれ君としてね」

「失礼します」

「ちよつと待とうか」

この場から立ち去ろうとしたグレンを止めるオダ。

「なんですか、オダさん」

「いや、軽い発言だった。君を傷つけたようだね。謝罪といつてはなんだが飯を食いに行かないか？」

「いや、なんでまた」

「君の固有魔術オリジナルについて話も聞きたいしね」

「!!」

驚くグレン。

「・・・どこで知ったんですか？」

「何、この前の君の魔術戦をみたところ、相手の魔術が中々発動しなかったからね。そこから推測して君の固有魔術オリジナルじゃないかと勝手に邪推していたんだが・・・その様子から見るとどうやら当たりみたいだね。どうかな、情報料もかねて飯を奢らせてくれないかな？」

「いやー」

「よし、じゃあ行こう！実はお気に入りのカフェ？屋さんを見つけてね」

「話を聞けー!!!」

無理やりグレンの手を取り連れ出すオダ。

グレンにとってこの出会いがこの1年間オダと長い付き合いとなり、さらには今後大きな影響を与えるなどは、その時は一切思ってもいなかった。